
魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

エクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

【Nコード】

N6860W

【作者名】

エクセル

【あらすじ】

第二次P・T事件から半年あまり再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍していた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲うそれが始まりだとも知らずに

プロローグ

第二次P・T事件から半年あまり
再びミッドを救った機動六課の隊員達は、元の部隊に戻り活躍して
いた。

そんなある日の夜、管理外世界にいたエクセルに新たな敵が襲う
それが本当の始まりだとも知らずに

運命にぶつかったとき、信じるのは自分が、それとも仲間との絆か
見つめよう・・・世界の命運を

狭間の世界で、はじまりの日を・・・

さあ、扉を開けよう

真実という名の扉を・・・

開けるのは・・・あなただ

衝撃の展開にご期待ください

プロローグ（後書き）

全てが懐かしい

なぜ、俺はここにいる

あいつは俺を殺した

憎いな・・・

プロローグ？（前書き）

第二次P・T事件から半年

ミッドチルダを救った機動六課は解散

執務官、次元航行部隊に復帰したエクセル・アーシュライトは現在
管理外世界にいた。

プロローグ？

―第118 管理外世界―

文化レベル B

魔法文化なし

なのは達の世界と同等と思ってくれていい。

俺は、エクセル・アーシユライトはその世界にいた。

現在いる場所のは都市。

詳しく説明すると、都心部の酒屋にいた。

エクセル「……うまいな、ここの酒は」

黒い執務官服に身を包んだエクセルは、グラスを置いた。

中身は酒だが、そんなに酔うほどではない。

店員「お客さん、お仕事はなにを？公務員ですか？」

エクセル「ええ……そんな所です。」

魔法文化のない世界で、魔導士と言っても笑われるだけだ。

すると、エクセルの隣に若い青年が立った。

ソラ「失礼します、アーシユライト執務官」

この、いかにも青年ですと言ってくれという顔の名前は、ソラ・カミナ。

年齢は17歳。もちろん立派な青年だ

透き通る青い瞳とこの顔で自分と同じ年と言ったら誰もが疑うだろう。

2ヶ月前から俺の補佐官として配属された

エクセル「来たかソラ。マスター、こいつにアルコールなしのカクテルを…」

ソラがエクセルの隣に座り、店員から出されたグラスを見た。

ソラ「執務官…」

エクセル「アルコールはなしと言ったる。安心しろ」

ソラがグラスを取って、赤いカクテルを飲み干す

ソラ「……エドが目標を見つけたそうです。」

エクセル「……了解。マスター、お金はここに」

テーブルにこの世界のお金を置く

店員「お仕事ですか？目標って言ってましたけど」

エクセル「・・・ええ、なんせ“化け物”ですから」

店員は怖くなったのか、ブルツと震えた。

―公園―

閉鎖領域に囲まれた空間にそいつはいた

黒い獣だ。人の二人分ほどだ

それに立ち向かう青年

エドワード・ミナ。通称エド

量産された魔導杖を構えた熱血漢を漂わせる青年が、堂々と黒い野獣の前に立った。

エド「俺様が相手だ！！」

相手の赤い目が、エドの目を見た。

エクセル「待て、エド・・・！！」

閉鎖領域に入って、エドの後ろに降り立つエクセルとソラ

エド「待ちませんよ!!」

エドが駆けた。相手に突っ込みながら、杖から魔力弾を撃つ

黒い獣「グルルルル!!」

敵が吠えた。同時に、黒い小さな矢がエドに放たれた。

エド「遅い!!」

ジャンプして、黒い獣の背中に乗った。

魔導杖を獣の頭に、向ける

エド「くたばりやがれ!!」

魔力弾を放とうとした、がその前に獣が動いた。

黒い獣「グオオオオ!!」

獣が暴れ、エドが落ちた。

エド「うおっ!!」

エドが倒れると、黒い獣がエドに牙を向けた。

エド「うわああ!!」

すると、エドへ飛び掛かろうとした獣の体を白い矢が、いくつも貫い

た。

黒い獣「グルルルアアアア!!」

黒い獣が白い矢が飛んできた方へ向いた。

エクセル「お前の相手は俺だ……」

執務官風な黒いバリアジャケットについた白いマントが風で揺れた。

エクセルの執務官時のバリアジャケットだ

黒い獣がエドからエクセルに標的を変えて、突進してきた。

エクセル「離れてろ……」

ソラがエクセルから離れる。黒い獣がエクセルに飛び掛かってきた

エクセルは懐にあった剣に手をかける。

黒い獣が、エクセルに触れようとした瞬間

エクセルの剣が抜かれ、獣の顔から胴体を両断した。

両断された獣の胴体は、エクセルの後ろに落ちる。

エクセルは剣。自分のデバイスであるブランド・ティータを鞘に納めた。

エクセル「ソラ、処理を頼む。」

ソラ「了解！」

エクセルがエドに近寄り、手を差し伸べた。

エド「すみません執務官。またやってしまいました」

エクセル「その癖をどうにかしろ。それでも俺の部下か」

エクセルは呆れたように手を掴んだエドを引っ張り、立ち上がらせる。

この短髪で、俺より4センチ高い身長175はあるエドは、突撃思考が絶えないのだ。

逆にソラは、自分と同じ身長でスレンダーで、髪は普通で冷静沈着だが自分が危機に陥ると、自分でも厄介になる男だ。

この二人、俺の補佐官なのにまだまだヒヨツ子だ

エクセル「ソラ、処理は終わったか？」

ソラ「はい。2分後に転送ポートで、回収班が来ます」

エクセル「そうか。じゃあ、それが終わったら…3人でこの世界の飯でも食い行くか」

そう言うと、二人の顔が明るくなった。

エクセル「だが、回収班が来るまで警戒は怠るな」

二人「了解!!」

―時空管理局―

あれから2日が経ち、管理局に戻ってきたエクセル達3人。

????「あつ……………」

エクセル達の目の前に、金髪の女性と鉢合わせした。

女性の服装は執務官服

エクセル達3人と女性が互いに敬礼した。

エクセル「じゃあ後で、俺の部屋だソラ、エド。」

ソラとエドが、女性の横を通り過ぎ角を曲がっていった。

????「……………」

エクセル「……………」

????「もう、いいんじゃないかな?」

エクセル「そうだな…周りに誰もいないみたいだし」

二人は近づくなり抱き合った。

????「久しぶり、エクセル……………」

エクセル「ああ、久しぶりフェイト」

お互い離す。この女性の名前は、フェイト・T・ハラオウン。

エクセルと同じ執務官であり、管理局で名前を知らない者はいない。

クロノ提督の義妹であり、機動六課の元メンバーで

エクセルとは恋人関係にある。

執務官に復帰したとはいえ、俺と彼女は3ヶ月も会えなかった。

それほど、今はお互いに忙しいということだ

フェイト「あの二人は補佐官？」

エクセル「そう。突撃思考たっぷりの補佐官達（笑）」

フェイト「フッフ、大きかった方の人は正にそんな様に見えたよ（笑）」

歩きながら、会えなかった3ヶ月間の話をしていた。

エクセル「同期のあの二人を見ると、スバルとティアナに見えてくるよ」

フェイト「六課が最初に出来た時は、まったくその通りだったよ」

―食堂―

フェイト「じゃあ、管理外世界にも……」

エクセル「……ここ最近、出現範囲が広まってる。最初はミッド、第2管理内世界、そして第3、第4と……」

画面に出現範囲を表示する。

フェイト「はやてにも依頼が来てるみたいだけど、今の仕事が手間取ってるみたいで」

エクセルはふつとある女性の名前を口にした。

エクセル「そういえば、なのははどうしてる？」

フェイト「ヴィヴィオの話じゃ、今度休暇を取って、故郷に帰るって……」

なのはの故郷

管理外世界出身の彼女の家は、極東の小さな島国だとか

エクセル「へえ、俺も行ってみたいな」

フェイト「いい所だよ 友達も紹介したいし（笑）」

そんな世間話をしていると、時間になったので

俺達2人は、互いの仕事に戻っていく。

この1週間後、戦いが始まるとは知らずに

プロローグ？（後書き）

ああ

苦しいな

体を切り裂かれたこの苦しみ

ねえ、はやく出してよ

暴りたいのよ

この爪もつづいてるの

第1話 始まりは異世界で（前書き）

この体・・・

この気持ち・・・

本当に快感だわ・・・

あら、出してくれるのね

第1話 始まりは異世界で

「無限書庫」

ヴィヴィオ「」

ユーノ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィヴィオが明るい表情で、出口に向かっていく

ユーノは、ヴィヴィオの荷物になる分厚い本を2冊ほど運んでいる。

ユーノ「ヴィヴィオ、こんな分厚いのを持って行くと・・・」

ヴィヴィオ「大丈夫ですよ」

出口を出ると、ユーノが持っていた本を大きなバックに入れるヴィヴィオ

ヴィヴィオ「向こうに行ったら、皆さんに見せるものですから」

ユーノ「無限書庫のものを管理外世界に持っていくのは、かなり大きな許可がいるんだけど、その辺を通してのことだよな？」

ユーノが言うと、ヴィヴィオは笑顔になり、こう言った。

ヴィヴィオ「本を貸してくださいって言ったら、許可してくれませんでした」(笑)

ヴィヴィオが許可書を見せた。

ユーノ「恐ろしい笑みだな〜（汗）」

???「ユーノくん ヴィヴィオ〜」

通路の奥から、サイドアップに髪を結んだ女性が走ってきた。

ヴィヴィオ「あっ、ママ〜」

ヴィヴィオが手を振るう。

???「支度出来た？」

ヴィヴィオ「うん いつでも行けるよ〜」

ユーノ「なのは、皆によろしくね」

女性の名前は、高町なのは

管理局の中で、フェイトと並ぶエリートであり有名な教導官でもあり空戦魔導士

魔導士の憧れでもある彼女は、エースオブエースという呼び名で呼ばれるほどだ。

なのは「うん じゃあ、行ってくるねユーノくん（笑）」

ヴィヴィオ「行ってきます、ユーノ先生」

「エクセルの部屋」

ピピピピピ

エクセル「……………」

報告書を書いていたエクセル。

ピピピ

エクセル「よし、報告書は終わりつと……………」

エクセルが椅子から立ち上がると突然、通信画面が開いた。

??? ヤッホー

画面に青い髪の女性が映った。いや、このテンション高い奴を女性と言ったらいいのか区別が出来ない。

エクセル「どうしたスバル？」

スバル・ナカジマ。ミッドチルダ湾岸特別救助隊の防災士長であり、六課のFW陣の一人だった。

スバル あのを、ティアと連絡がつかないんだけどさ、知らない？

エクセル「ティアナか？うーとティアナは確か」

―第2管理世界―

ティアナ「……………なによ」

―エクセルの部屋―

エクセル「忙しいんだよティアナは」

スバル「だよね」

なにが言いたいんだ。

スバル「じゃあ、また連絡するね」

通信画面が閉じた。

エクセル「なんだったんだ？」

すると、今度はドアが開いた。

ソラ「失礼します。執務官、時間ですので・・・」

エクセル「ソラ、悪いな・・・通信が入ってたから行けなかった」

エクセルは、ソラと一緒に部屋を出た。

ソラ「これが、アンノオンの出現予想された世界です」

廊下を歩きながら、ソラから資料を渡された。

あの黒い獣は、アンノオン扱いになっていた。

なにせ、獣の種類は様々で正体不明なのだから

残骸を回収してはみたものの、残骸は3日足らずで自然消滅してしまっただから。

エクセル「管理外世界がやはり多いな・・・ここも・・・うん・・・えっ？」

エクセルは、ある管理外世界のリストを見た。

エクセル「なんで・・・」

エクセルが立ち止まるとソラが近寄って、リストを見た。

ソラ「第97管理外世界……この世界がなにか？」

エクセル「ソラ、俺達が管理外世界から帰ってきたのは？」

資料に目が釘付け状態のエクセルが言った。

ソラ「はい？……1週間は前ですが」

慌てた表情でエクセルは資料をソラに押し付ける

エクセル「ソラ！艦に行つて、出航準備だ！！」

ソラ「えっ！？今ですか！！」

エクセル「ああ、エドを連れて一時間以内に出航準備だ！！」

ソラ「ええ！？」

エクセルは走りだし、急いで自室に戻って行った。

第97管理外世界

現惑星名称「地球」

出現場所「極東島国 日本」

出現率

現段階 80.91%

資料にはそう記されていた。

なのはの世界

管理外世界では行動は厳しく、リミッター制限が激しい。特に今、
なのはのリミッター制限はAランク扱いなのだ

そんな状態で大群に襲われたら

いくらエースオブエースといえど

エクセルは最悪の場合を考えてしまった

―その頃 海鳴市―

なのは「海風が心地いいね」

ヴィヴィオ「うん」

高町親子は現在、海岸沿いを歩きながら、なのはの実家へ向かって
いた

なのは「家に着いたら、荷物を置いてお出かけだね」

ヴィヴィオ「皆さんに会えるの楽しみだな」

ウキウキしたヴィヴィオを見たなのはは笑って、立ち止まった。

ヴィヴィオ「なのはママ？」

なのは「この奥が、フェイトママと初めて名前を呼び合った場所だよ（笑）」

なのはが指差す。ヴィヴィオは、その方向を見た。

ヴィヴィオ「そうなんだ」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そっか。もう10何年も前になっちゃうんだ

なのはもその方向を向いた。

この場所で、フェイトちゃんと名前を呼び合って、別れて……あの頃から、変わってないな

懐かしく感じた場所は、久しぶり。なのははそう思いながら、ヴィヴィオとまた歩き出した。

その光景を遥か海の彼方で見つめていた黒い人影は

「見つけた」

ニヤリと笑った人影は、霧のように消え去った。

―高町家―

ガラガラ

なのは「ただいま」

なのはが入ると、中から

????「なのはー!!」

ヒュンヒュンヒュン!!

なのはに向かって回転した何かが飛んできた。

なのは「ふえっ!?!」

なのはは、咄嗟にしゃがんで避ける。

カランカラン!!

飛んできたものは、地面を跳ねて地面を転がった。

それは……………

なのは「木刀……………?」

転がったのは、木刀だった。

なのはは、家の中を見た。そこには

???「遅いわよ、なのは!!!」

短髪の女性が、なのはに怒鳴った。

その女性の後ろにもう一人、ロングヘアの女性がいた。

なのはは、その2人を見て

なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

その2人は、なのはの親友であるアリサ・バニングスと月村すずかだった。

なのはが靴を脱いで、アリサ達に駆け寄った。

なのは「久しぶり〜!!元気だった!!」

アリサ「アンタね〜なんで…………なんで連絡しないのよ〜!!」

アリサがなのはの胸ぐらを掴んでぐらぐら揺らす。

すずか「アリサちゃん、落ち着いて!？」

なのは「ふえふえ〜〜」

なのはは既に、目を回し、持っていたバックを床に落としていた。

―五分後―

なのは「もう〜お姉ちゃん、余計なことしないでよ〜」

みゆき「私はてっきり、アリサちゃん達は知ってるものかと思ったんだよ〜」

アリサ達がここにいたのは、なのはの姉であるみゆきが2人に知らせたからであった。

前に帰ってきた時、2人を呼ばなかったことにアリサは怒っていたのだ。

すずか「ヴィヴィオちゃん、この本って異世界の歴史書なの？」

すずかが、ヴィヴィオの持ってきた本を持つ

ヴィヴィオ「はい。ミッドチルダだけじゃなくて、管理世界全部の歴史が載ってるんです」

アリサ「でも……………」

アリサがページをめくっていく。

アリサ「私達、向こうの文字は・・・ねえ（汗）」

ヴィヴィオ「あつ、大丈夫ですよ（笑）」

アリサ・すずか「えっ？」

すつとんきよな返事をする2人がヴィヴィオを見る。

すると、ヴィヴィオがなのはからレイジングハートを借りてきて

ヴィヴィオ「レイジングハート、翻訳文にして（笑）」

レイジングハート《はい。少々お待ちを……………》

レイジングハートが本をスキャンした。

アリサ「毎度毎度思っけどさ、この・・・レイジングハートだっけ？」

アリサがレイジングハートを指差す。

なのは「うん。」

すずか「水晶なのに凄いわよね。小学生の時なんか、ただの水晶で首からぶら下げてたのに、今じゃあふわふわ羽生えて浮いてるし…」

なのは「にやはは（笑）あれから、色々な機能入れちゃったから」

すずか「壊れないの？」

なのは「月に一度、整備してもらってるから平気だよ（笑）」

レイジングハート《その通りです》

レイジングハートが答えた。

すると、アリサとすずかの前に翻訳文した文面が表示される。

アリサ「おお〜！」

すずか「わかりやすい……………」

その後、なのは、アリサ、すずか、ヴィヴィオはアリサの家に向かった。

ーアリサの家ー

庭でお茶をしながら、お互いあれから何があったのかを話していた。

アリサ「すずかったら、五人に告白されたのに、全部断ったのよ〜」

すずか「ア、アリサちゃん！？／＼／＼／＼／＼」

すずかは頬を赤くした。

アリサ「なによ〜あんな男達興味ないって言ったのは誰よ〜」

すずか「そんな事言ってないよ〜／＼／＼／＼」

手を振りながら、言ってないという仕草をするすずか。

ヴィヴィオ「だったら、なのはママも負けてないよね〜」

ヴィヴィオの言葉に、アリサ達が反応した。特にアリサの反応は目にも止まらぬものだった

アリサ「なになにヴィヴィオ!?!なのはが何!?!」

ヴィヴィオ「それは〜」

なのは「なななな、なんでもないよ〜!!あ、あはははは／＼／＼／＼」

顔を赤らめるのはにすずかは、なんで赤くなってるの?と聞く

代わりにヴィヴィオが写真を見せる。

ヴィヴィオ「この男の人とママはキスしたんだよ〜」

ヴィヴィオが写真に写ったエクセルを指差すと、2人は

アリサ・すずか「キス〜!!／＼／＼／＼」

なのは「あははは(汗)」

すると、すずかがある写真を見つけた。

すずか「ねえ、この写真・・・なんでみんなボロボロなの？」

すずかが見たのは、エクセルをはじめ主力メンバーがバリアジャケットを装着してボロボロになった状態だった

なのは「これはね、解散する時にエクセルくん一人VS私達での全力全開バトル。」

アリサは写真を見て、

アリサ「一人ってかなりつらいわよね〜全員ボロボロってのはどういう事よ?。」

なのは「あはは(汗)ちょっと勢いがありすぎちゃってね」

アリサ「ふ〜ん・・・あれ?このフェイトに似てる女の子は誰?。」

アリサがヴィヴィオの隣にいたフェイト似の女の子を指差した。

なのは「あつ、その子はフェイトちゃんのお姉さんだよ」

アリサ& amp; すずか「へえ〜お姉さんか・・・ええー!?!?!?。」

アリサとすずかの驚きに、なのははビクツとした

アリサ「なっ、なんでこんな小さな子が!!?」

アリサが聞くと、なのはは一度躊躇したが洗いざらい2人に話した。

アリシアのこと、フェイトのことも全部

ー10分後ー

ヴィヴィオ「なのはママ、そろそろ、ストライクアーツの練習したいよ」

ヴィヴィオが立ち上がる。

なのは「ああ、そうだね。じゃあ庭でアリサちゃん達に見てもらおうか」

ヴィヴィオ「うん」

全員が庭へ移動すると、アリサがなのはに尋ねた。

アリサ「ストライクアーツってなんなの?」

なのは「こっちで言うところと格闘技だね。」

すずか「ヴィヴィオちゃんが格闘技?ちょっと意外かも」

なのは「それでも中々やるんだよ〜うちの娘は」

エッヘンっ と胸を張るなのは

レイジングハート《準備が出来たようです》

ヴィヴィオが練習着に着替えてきた。ヴィヴィオは手には、ウサギのぬいぐるみが握られていた。

なのは「じゃあレイジングハート、仮想敵を2体。」

レイジングハート《はい。では、難易度はBへ設定します》

ヴィヴィオの周りに、黒い格好した人間が現れる。

すずか「本当に大丈夫？」

心配するすずかが、ヴィヴィオを見た。

ヴィヴィオ「じゃあ行くよ、クリス！服装は練習着のままです」

握られていたウサギのぬいぐるみが、ピシッと手を上げた。

アリサとすずかはビックリするが、この後の出来事にさらに驚くこととなる

ヴィヴィオがぬいぐるみを掲げる。

ヴィヴィオ「セイグリッド・ハート、セーット アップ！！」

ヴィヴィオの体が煌めいた。体が成長していき髪はサイドアップ、身長はなのはを越し服装は練習着のまま

この姿は、ゆりかごで見せたヴィヴィオの聖王の姿だ

自称 聖王モード

またの名を大人モードである。

ヴィヴィオ「……………んッ！」

グローブを再度確認し、身構えるヴィヴィオ

アリサ「ヴィ……ヴィヴィオが」

すずか「成長しちゃった……………」

なのは「あれがヴィヴィオの特殊な体質 フェイトちゃんなんか腰抜かしちゃったけどね（笑）」

苦笑する2人。

ヴィヴィオ「よし……………」

ヴィヴィオがステップをとりながら、仮想敵へ仕掛けた。

その速さは、スバルやノーヴェでも驚くほどだ。

ドン！

ヴィヴィオの拳が仮想敵の胴体に食い込む

ヴィヴィオが仮想敵へさらに拳を叩きつけ、横から仕掛けてきた2体の内の一体へ突っ込んで回し蹴りする

そして一体の敵の攻撃を流しながら魔力のこもった一撃を食らわせる。これが彼女の得意スタイル、カウンターヒッターだ

《COMPLETE》

レイジングハートが言うと、アリサとすずかがパチパチと拍手した。

アリサ「ヴィヴィオやるう〜」

ヴィヴィオ「ありがとうございます」

一夜

なのは「遅くまでゴメンね」

あれから、ヴィヴィオの魔法の練習となのはの教え方に驚きを隠せない二人、そして時間はいつの間にか18時を過ぎていた

アリサ「大丈夫よ 車で送って行くかうか？」

なのは「あつ、じゃあお願いしようかな」

すずか「明日はみんなでお買い物しようね（笑）」

ヴィヴィオ「そうですね。あつ、クリスはお留守番かな（笑）」

ヴィヴィオの肩に乗っていたセイグリッド・ハート、愛称クリスは焦った仕草をした

ヴィヴィオ「冗談だよ」

ヴィヴィオが言うと、クリスは良かったという仕草をした。

車に乗り込んだ4人は、談笑しながら家を出ていった。

なのは「レイジングハート・・・」

なのはは、念話でレイジングハートに声をかけた。

レイジングハート「なんですか？」

なのは「私達は、この世界から離れて暮らしてたけど、故郷に戻って久々に友達と会おうと懐かしい感じがする・・・」

レイジングハート「小学生の時ですか？」

なのは「うん。今でもたまに思うよ、魔導士を続けなかったらどうなってたかなって」

レイジングハート』きつと、後悔してたと思います。』

なのは『後悔?』

レイジングハート』はい。あの雪の日の出来事も含め、ヴィヴィオ達との出会い・・・これがもし全て、フェイトさんになっていたら・・・マスターはきつと後悔してました』

もし逆にフェイトが、あの雪の日の出来事で負傷して、その痛みをずっと引きずって

ヴィヴィオや六課メンバーとの出会いが全て無かったことになる。

なのは『そうだね・・・今の私がいるから、ヴィヴィオやみんながいるんだよね。ありがとう、レイジングハート』

レイジングハート』いえいえ・・・』

なのは「ねえ、ちよつと遠回りしない?」

なのはがアリサに言った。

アリサ「遠回りって、どこを通って?」

なのは「みんなで通った学校」

すずか「うん、いいかもね」

たまにはねつと、すずかが言つとアリサはため息をつき

アリサ「そうよ、たまには思い出の場所に行くのもね。よし、じゃ

あここを曲がつーっ！！！！」

アリサが急にハンドルをきった。車はガードレールにぶつかりそうになったが、間一髪免れた。

すずかは頭を抱えながら、起き上がった。

すずか「アリサちゃん？急にどうしたの！？」

アリサ「へっ、変な人がいきなり出てきたから、おもいつきりハンドルを…」

なのは「変な人？」

アリサが後ろを指さした。

確かに、ロングヘアで変な服装をした女性が道路の真ん中にいた。

幸い、道路に車もいなかったからいいものの

アリサ「ちょっとアンタ！危ないでしょう！！」

アリサが車から降りて、文句を言いながらその女性に近づいていく

すずかやなのはとヴィヴィオも車から降りた。

なのは「あれ・・・？」

なのはは、周りを見て違和感を感じた。

ヴィヴィオ「なのはママ、どうしたの？」

なのは「うん、人が居なすぎるって」

そう言われたヴィヴィオも辺りを見渡した。確かに、人は愚か、車すら走っていない。

アリサ「ちょっとアンタ聞ってるの!？」

すずか「ちよつとアリサちゃん!」

アリサを止めようと、すずかがアリサの後ろに立った。

すると、女性がアリサ達へ振り返った。

?????「.....」

なのはとヴィヴィオが少しだけ明かりに照らされた女性の顔を見た瞬間、体と口が反応しアリサ達に警告を発した。

なのは「二人とも、離れて!!!」

レイジングハート《特定。この場所から1キロ先まで封鎖領域です》

アリサ& amp ;すずか「えっ?」

二人が振り返った。なのはが走る前に、女性の方が素早く動いた。

?????「遅いわ」

女性の両腕がアリサとすずかのみぞに強烈な一撃を与え、二人を気絶させた。

ヴィヴィオ「アリサさん、すずかさん!!」

女性の姿がはつきり見えてきた。光に照らされ、今度はちゃんと服装と顔が見えた。

なのはは、身構えた。

女性の格好は、忘れることが出来ない。

青いスーツに?という番号が印されていた。

なのは「戦闘機人NO.2・・・ドゥーエ」

その女性は、J・S事件の時にたった一人死亡した戦闘機人名前は、ドゥーエ

でも、どういう事なの

彼女は既に死んでいるのに・・・

ドゥーエ「ごきげんよう、高町なのはさん。妹達がお世話になります」

笑いかけてきたドゥーエを見たなのはは、レイジングハートを持つ。

ドゥーエ「動いたら・・・」

ドゥーエが、手に装備していた爪をアリサの首へ向ける

ドゥーエ「この威勢がいい子を殺すわよ」

なのは「ぐっ……目的はなに!!」

ドゥーエ「目的なんかないわ……そうね、あるとしたらそれは……
貴女の抹殺」

なのはは息を飲んだ。何故自分なのだろうと考えながら、アリサと
すずかの救出の方法を考えていた。

ドゥーエ「でも、それだけじゃつまらないから、この子達をかけて
勝負しない？」

楽しんでる……この人は、楽しんでる

ドゥーエ「場所は、学校にしましょうか……この先にある」

ドゥーエが指さす方向を見たなのはは悟った。自分が通っていた小
学校だ

なのは「………受けてたつわ!!」

返答を聞いたドゥーエは、アリサとすずかを抱え

ドゥーエ「じゃあ、30分後にお会いしましょう」

すると、ドゥーエは黒い霧のようなものに包まれて消えた。

封鎖領域が消え、周りに人や車などが戻っていた。

ヴィヴィオ「なのはママ」

なのは「・・・ヴィヴィオ」

なのはがヴィヴィオの手を引いて、車に乗り込む。

ヴィヴィオ「ママ・・・その・・・気持ちはわかるけど」

ヴィヴィオが話かけるなか、なのはは無言で車を走らせた。学校とは正反対の方向へ

なのは「ヴィヴィオ・・・ママの話をちゃんと聞いてー！ー」

ー学校ー

アリサ「ん・・・ここ・・・って！！きゃああッ・・・！！」

アリサが目覚めるとそこは、学校の屋上だった

しかも、吊されていた。

アリサ「なっ、なっ！・・・なによこれー！ー！！」

アリサが叫ぶと、隣でも同じく吊されていたすずかも目を覚ました。

すずか「ええ！！なっ、なにー！！？」

二人が吊されているのは、屋上の柵の外である淵。三階なので、ロ
ープが切れたらただじゃすまない。

ドゥーエ「あら、お目覚め・・・？」

淵の近くに座っていたドゥーエが二人を見下ろす。

アリサ「アンタは！！」

ドゥーエ「はあ、うるさい子ね」

すずか「お願いします！助けてください！！」

すずかがドゥーエに言うと、ドゥーエはニコツと笑い

ドゥーエ「い・や・よ」

ウフフと笑った。

それを聞いたアリサは頭に血がのぼり、ドゥーエへ怒鳴る

アリサ「ふざけんじじゃないわよ！！早く助けなさいよ！！」

アリサが暴れると、吊されていたロープがブラブラ揺れる。

シャキン

ドゥーエは装備していた爪をアリサの顔へ向けた。

アリサ& a m p・すずか「ーッ！！！」

ドゥーエ「いい加減黙らないと、可愛い顔が傷つくわよ……」

アリサはドゥーエを睨んだ。すずかは怯えながら、アリサを見た。

アリサ「わかったわよ……」

すると、ドゥーエは校門の方へ向いた。

ドゥーエ「ーッー来たわね」

ドゥーエの一言に、二人は校門の方を向いた。

暗くてよく見えない。ドゥーエが立ち上がると

ドゥーエ「貴女達の怖いお友達が」

月明かりで、校門の辺りが照らされた。

そこには、なのはが立っていた。

アリサ& a m p・すずか「なのは(ちゃん)！！」

二人の顔が明るくなった。だが、顔を伏せていてよく表情が見えない

ドゥーエ「よく見ておきなさい……あの子の本性を」

ドゥーエが屋上から飛び降り、グラウンドへ膝をついて着地した。

ドゥーエ「よく来たわね」

なのは「……私が勝ったら、二人は返してもらおうわ」

まだ顔を伏せていたなのはの声は恐々しい。

ドゥーエ「ええ、いいわよ」

すると、なのはが顔を上げた。その顔は、今まで誰にも見せたことない表情だ。

なのは「レイジングハート……」

ドゥーエが身構えた。

なのはがバリアジャケットを装着した。

ドゥーエが先に動いた。なのはへ爪を繰り出す

スン！

刃が風を切り、なのはの顔へ

だが、なのはは首を傾げるだけで爪を避けた。

ドゥーエ「ッ!？」

驚くドゥーエだが、さらに爪を繰り出す

だが、なのはは避けるだけだった

なのは「今度は……」

なのはの腕にピンクの円が巻き

なのは「デイバイン……バスター」

至近距離での砲撃にドゥーエは防ぐことが出来ず、吹き飛ばされた。

ドオーーン!!!

ドゥーエは、体育館の壁へ叩きつけられ気絶した。

ドゥーエ「……………」

アリサ「やった!!!」

すずか「なのはちゃん!!!」

なのはが二人に向き直り、微笑んだ。

なのは「今降ろすから!」

なのはが一步踏み出した次の瞬間

ドゥーエ「……………」

突如、ドゥーエが立ち上がった。なのはがドゥーエへ振り返った。

なのは「うそ……至近距離でデイバインバスターを受けて、立て

るなんて」

ドゥーエ「まだ・・・足りないわ。私は、誰も・・・コロシテナイ」
ベキッ！バキッ！

ドゥーエの腕、手、胴体から異形なモノが飛び出した。それは、武器でもあり腐った腕でもある

なのは「ーーーーッ！！」

なのはが後退りした。

ドゥーエ「・・・シニナサイ」

彼女が消えた。いや、次の時には目の前にいたのだ

なのは「なっ！？」

ドゥーエの腕に付いた刃物が横に振られた。

レイジングハート《しゃがんで下さい！》

レイジングハートの声で、なのははしゃがみ
その場からはねのけた。

ドゥーエ「オソイオソイオソイ・・・！！」

まただ、またドゥーエの動きが見えなかった。

なのは「速い!!」

なんなの!?!この速さ!!

なのははレイジングハートを構え、魔力を収束させる。

なのは「シューーッット!!」

魔力弾5発ほど放ち、動きを操作した。

ドゥーエは魔力弾を避け、狙われないように辺りを移動していた。

なのは「……………」

集中して、動きに惑わされず正確に撃ち込む…

魔力を光に乗せて…

なのは「……そこ!!」

ドゥーエを捉えて、瞬速の魔力弾を撃ち込んだ。

ドスツ、ドスツ!!

ドゥーエが弾かれ、宙を舞った。彼女は空中で体制を整え、着地する

ドゥーエ「へエ……コノジョウタイノワタシニアテルナント……

」

声が変わったドゥーエが装備した爪をペロリと舐めた。

なのは「アリサちゃん!!すずかちゃん!!」

なのはが叫ぶが間に合うはずがない。

アリサ&mp・すずか「きゃああっーーーー!!」

叫び声が響いた。ドゥーエがニヤリと嗤うが

???《ソニック・ムーブ》

閃光が、上空から斜めに走った。地面に誰かが着地した。

なのは「えっーーーーー」

???「どうやら間に合った様だな」

ロープに縛られたアリサとすずかの二人を降ろした。

アリサ「あ、あんたはーーーー」

すずか「写真で見たーーーー」

その人物は、エクセルだ。

エクセル「大丈夫か？」

アリサ「えっ、ええ……」

「良かった」と言ったエクセルは立ち上がり、ドゥーエへブランド・テイータを向ける。

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトだ。No.
2ドゥーエ、殺人未遂の容疑で逮捕する!!!」

ドゥーエ「タイホダト? ワラワセルナ・・・!!!」

ドゥーエがエクセルへ突っ込み、腕についた刃を振るう。

キンッ!!

ドゥーエ「!?!」

ドゥーエは自分の目を疑う。エクセルがブランド・ティータの切っ
先で受けとめたのだ。

エクセル「その程度か・・・」

ブランド・ティータの形態が変化し大剣へとなる。

ドゥーエが後ろへ跳ね退けると、青いバインドがドゥーエを拘束し
た。

ドゥーエ「ナッ!?!」

エクセルが大剣を振り上げた。

エクセル「ライトザンバー!!!」

エクセルがドゥーエへ大剣を振り下ろし、ドゥーエを高く宙へ飛ば
した。

ドゥーエ「ガッ!！」

エクセル「なのは、今だ!！」

エクセルがなのはに叫ぶと、なのははレイジングハートを構え

なのは「ダイバインバスター!！」

ピンクの砲撃が放たれ、ドゥーエへ直撃した。

ドゥーエ「ガアア!！」

ドゥーエが地面に落ちた。すると、ドゥーエから黒い影現れ拡散した。

エクセル& amp・なのは「!?!?」

拡散した黒い影は、黒い鳥型の獣の姿へ変化した。

なのは「あれって・・・」

エクセル「ああ、最近騒がれてるやつらだ・・・」

二人は、建物三階建てを余裕で越えている黒い鳥を見た。

アリサ& amp・すずか「なのは(ちゃん)!!」

アリサとすずかが走ってきた。

なのは「二人とも大丈夫!？」

なのはが二人を見て言った。

すずか「大丈夫だけど・・・」

アリサ「どうするのよアレ!? 気持ち悪いの!！」

アリサが黒い鳥を指差した。なのはは「大丈夫」と言った。

なのは「あんなのちよろいよ(笑)」

エクセル「とりあえず、二人には避難をしてもらおう」

なのは「そうだね。でも何処へ？」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された。

ソラ 執務官、転送準備完了です

エクセル「了解。」

エクセルはアリサとすずかを見た。

エクセル「二人には、船に避難してもらおう」

なのは「ちょっと待って! 二人を船へ避難させるの!？」

エクセル「そうだけど…結界の外よりマシだろ?」

アリスとすずかの足元に転送陣が現れる。

すずか「二人とも、気をつけて」

アリス「やられたらお仕置きよ!!」

キーン!

二人が転送された。エクセルはなのはへ向き直り

エクセル「さて、終わらせるか(笑)」

なのは「だけど・・・リミッターがあって召喚がー」

エクセルはニコツと笑い、コンソールをいじりボタンを押した。すると、なのはの体が光った

なのは「えっ!リミッター・・・解除!??」

エクセル「クロノ提督から、許可はもらった。ヴィヴィオが連絡をくれたおかげで(笑)」

なのははヴィヴィオに、エクセルがフェイトを呼んでくれとは言ったが、リミッターのことは一言も言っていない。きっと、ヴィヴィオなりの気づかいだろう。

なのは「もう・・・じゃあ、下がってて私が終わらせるから」

エクセルは、小学校から離れて黒い鳥を見つめた。

ソラ データは取っています。

エクセル「ああ・・・」

なのはがレイジングハートを地面につけ

なのは「やるよ、レイジングハート!!」

レイジングハート《はい、マスター》

足元に白い陣が形成され、体に白い魔力色を纏う。

なのは「星屑を統べる龍よ、流星になりて来たれ、高町なのはの名のもとに・・・召喚！スターダスト!!」

パリン！

足元の空間が割れ、ヴォルテールに似た白い巨大な龍が現れる。これは、なのはがある試練を達成し、契約した神龍 スターダストである

黒い鳥は、スターダストを見るなり突撃してきた。

なのは「弾いて!!」

スターダストの目が光り、黒い鳥を殴り飛ばした。

黒い鳥「キシヤアア!!」

エクセル「なのは！倒さず封印だ!!」

なのは「了解!!」

スターダストが、黒い鳥を素早い動きで掴んだ。

なのは「リリカルマジカル！封印!!」

レイジングハートからピンクの砲撃が走り、黒い鳥に直撃した。

黒い鳥が咆哮を上げ、球体へと姿を変えレイジングハートへ吸収された。

なのは「封印完了……」

エクセル「よくやった……（笑）」

「軌道上 次元航行艦」

この船は、エクセルが指揮をとる次元艦“プロメテウス”だ

エクセル「悪かった、急に船に連れてきたりして」

エクセルは、アリサとすずかに頭を下げた。

アリサ「ふんっ、とんだ迷惑だわ!」

すずか「まあまあアリサちゃん。でも、助かりました（笑）」

エクセル「なら、いいが……」

教導服に着替えてきたなのはがブリッジへ入ってきた。

なのは「失礼します。教導隊所属、高町なのは一等空尉、これよりそちらの指揮下に入ります」

ブリッジにいた局員全員が立ち上がり、なのはへ敬礼した。

アリサ「うわあ〜」

アリサは、その光景を見て驚いた。

すずか「なのはちゃんってかなり偉い人なんだ・・・」

ブリッジを出た4人は、食堂へ向かった。

アリサ「有名人ってのは聞いてたけど・・・まさか、これほどとはね〜」

4人がここまで来るまで、通りかかった局員がなのはを見るなり敬礼していた。

エクセル「なのはは若者達の憧れだもんな」

なのは「エクセルくん、もしかしてこの船にいるのってほとんど新人なの？」

なのはが聞いてきた。それもそうだ
通りかかった局員のほとんど、いや肝心なところ以外は新人がほとんどなのだから

ソラ「はい、体の方には異常はみられません。」

ソラが通信しているのは、片目を眼帯で隠している少女だ。

??? そうか…局に着いたら、私が立ち合おう

通信画面が消えた。医務室のベットには、ドゥーエが寝かされていた。

その後、ドゥーエの体に変化はなく眠り続けていた。

ソラ「こうして見ると…ただの美人なんだけどな」

コンソールをいじるソラ。次の瞬間、ドゥーエの手がソラの腕を掴んだ。

ソラ「!？」

ドゥーエ「今…私のこと、綺麗って言った？（笑）」

ドゥーエが目をあげ、ソラへ微笑んだ。

第1話 始まりは異世界で（後書き）

ー次回予告ー

アリサ「なんで私達が連れていかれなくちゃならないのよー!!」

すずか「まあまあアリサちゃん！落ち着いて!!」

アリサ「管理局に連れて来られた私とすずか、久しぶりにあったフ
イトやユーノ達なんだけど…」

すずか「これってIDカード？それに私達の顔写真」

アリサ「一般人の私達がなんでこんな目に…!!」

すずか「次回 リリカルなのは第2話」

アリサ「入局」

アリサ&mp;すずか「TAKEOFF!!」

第2話 入局

ー医務室ー

ソラ「起きてたのか…」

ソラはドゥーエの手を振り払い、身構えた。

ドゥーエ「んゝはぁー」

ドゥーエは起き上がって、体を伸ばした。

ドゥーエ「ええ…あなたが通信してる辺りから」

ソラ「…逃げるのか」

ドゥーエはソラを見てクスリと笑った。

ドゥーエ「いいえ、逃げないわよ…（笑）」

ソラ「…そうか」

ドゥーエの顔を見ていたソラは、感情が揺らいだ。

ドゥーエ「ねえ、私はどうなるのかしら？」

ソラ「局に着いて早々、拘置所行き…」

なんだろ…この気持ち…この人を見てると

ドゥーエ「そう……」

ただの女性に見えてくる……

―管理局 部屋―

すずか「話で聞いてたより大きいのね、管理局って」

アリサ「中に街があるのが一番の驚きよ」

二人がいる部屋は、とある人の部屋だ。室内には現在、エクセルとアリサ、すずかしかない。

エクセル「管理局は、次元の中に浮かぶ要塞ともいえる場所だからな」

すると、部屋のドアが開き一人の女性が入ってきた

フェイト「アリサ、すずか（笑）」

フェイトだった。久しぶりにあった幼なじみに微笑むフェイトに対して、アリサとすずかが近寄り、わぁーわぁーと騒いでいた。

????「えと、そろそろいいかい……?」

フェイトの後ろで、頬をかいている男性が二人に言った。

アリサ& amp ;:「はい」

男性がエクセルに向き直った。エクセルは男性に敬礼し

エクセル「お久しぶりです、クロノ提督」

その男性、クロノ・ハラオウンはフェイトの義兄にして管理局提督である。

クロノ「ああ、久しぶりだ。」

クロノがエクセルに微笑み、部屋の中央にあったソファーに腰掛けた。アリサとすずかも腰掛けた。

クロノ「さて、君達の現状なんだが、残念ながら今の状態で帰したらまた襲われる可能性が高いため、管理局で保護する形になった。」

アリサ「保護って…つまり、危ないからここにいろと？」

クロノ「そういうことになる」

アリサとすずかが顔を見合せた。

クロノ「返事はすぐには言わない。ゆっくり考えてくれ」

クロノは立ち上がり、部屋を出て行った。

「フェイトの執務室」

アリサ「変なことになったわね」

すずか「うん」

エクセルとフェイトは二人を見て、頭を悩ませていた。

フェイト「はあ、本当についてない」

はあとため息をついた。

エクセル「まあ、過ぎたことはしょうがない」

すると、エクセルの横に通信画面が表示された

エクセル「ん……ソラ？」

相手はソラだった。

ソラ「執務官、ドゥーエが目を覚ましました」

エクセル「そうか、じゃあ……」

んっとエクセルは奇妙な発言に気が付いた。

エクセル「おいソラ、今ドゥーエのことを名前で呼んだか？」

ソラ「そうですが…?」

ソラは平然とした表情で、エクセルを見た。

エクセル「いや…なんでもない。すぐに行くからその場で待機してくれ」

通信画面を閉じ、今度はエクセルがため息をついてしまった。

フェイト「どうしたの?」

エクセル「ソラがドゥーエの名前を普通に口にした。」

フェイト「普通だと思うけど?」

エクセル「あいつの場合は、普通じゃないんだよ……………」

ー医務室ー

ドゥーエ「ありがとうソラ(笑)」

ソラが差し出したコーヒーを笑って受け取るドゥーエ

ソラ「礼なんてしなくていいよ」

コーヒーを飲むソラとドゥーエ
さっきから一言も喋らない二人。

ドゥーエ「なにか喋ったら…?」

ソラ「話すことはないよ……」

ドゥーエ「さつきからそればかりよ」

ソラ「……すまない、君みたいな美人と話すのは初めてで」

美人という言葉にドゥーエは頬を赤くした。

ドゥーエ「そっ、そっ……／＼／＼」

ソラから顔を背け、コーヒーを飲み尽くす。

ドゥーエ「ごちそうさま／＼／＼」

ー廊下ー

フェイト「バーサーカー……？」

エクセル「2ヶ月前に起こった大量殺人の件は知ってるか？」

エクセルが話しているのは、2ヶ月前に起こった管理世界で起こった大量殺人事件だ。

フェイト「うん。確か、エクセルが担当した事件だよね？」

エクセル「その事件の首謀者がバーサーカー、またの名を狂戦士と呼ばれていた男だった。ただの犯罪者と思ってたけど、実際は――」

―2ヶ月前 管理世界―

その頃はちょうど、ソラとエドが配属されたばかりの頃だった。

大量殺人の集団がビルを占拠し、管理局へ金の請求をした。

その首謀者は、バーサーカーと呼ばれており以前から手配されていた。

その事件の緊急の担当者がエクセルだった。その男がロストロギアの強奪の疑いもあったからだ

エクセルとソラ、エドがビルへ突入し集団のほとんどを制圧し、残るは首謀者のみだった。だが、バーサーカーと呼ばれた男をあまくみていた。

バーサーカー「てめえみたいな野郎に俺様が捕まるか!!」

エクセル「諦める…チェックメイトだ」

バーサーカー「ふははははは!! チェックメイトだと、この俺様が…負けるわけがない!!!!!!」

男の目が白目になり、目の前から消えた。

ソラの持った片方の双剣が宝石を砕き、そのまま男の腹を貫いた。

グシュツッ！

エクセル「なっ！！」

ソラが双剣を引き抜き、エクセルの方を見た。

穏やかな顔が振り返り血を浴び、まるで殺人鬼を思わせるものになっていた。そして――。

エクセル「――お前」

ソラ「……はい」

エクセルはソラの目を見た途端に全てを悟った。青い瞳は真つ暗な紫へと転じていて、あの男と同等か、それ以上かはわからないがこの青年 ソラは、得体の知れないモノを秘めているのかもしれないその時の俺は、少なくともそう思っていた。

そして2日後、ソラから事情を聞くことにした

ソラ「自分の家系は、生まれて直ぐある儀式をするんです」

エクセル「儀式…？」

ソラ「はい。自分の家系の先祖は元々、ベルカ王朝の騎士であって“狂戦士団”という騎士団を率いていました。」

エクセル「狂戦士団」…？」

ソラがコクリと頷いた。その後聞いたのは、自分の血にはその狂戦士の血が濃く残っていて、その血を覚醒させるための儀式とソラのデバイスである双剣“ニルヴァーナ”の授与。それ以上の詮索はしなかった

ソラのあの強さが狂戦士の力だとすれば、彼には戦ってほしくない。

エクセル「ソラ、エド……お前達に役割を傳達する」

その後、エドを呼んで二人の役割を与えた

エクセル「エド、お前には現場での戦闘専門…そして、ソラには俺の補佐役だ」

ソラ「その役割、慎んでお受けします」

フェイト「そうだったの」

エクセル「それ以来、ソラは自分のデバイスを見せない……けど」

フェイト「けど…？」

エクセル「いずれ、ソラの力が必要な時がくる…そんな感じがする」

―医務室―

医務室でドゥーエへの事情聴取をすることになった。

エクセル「じゃあ、質問いいかな？」

ドゥーエ「どうぞ。」

エクセルとフェイトが順々に、ドゥーエへの事情聴取が始まった。
まずは、ドゥーエ本人かの確認

これは彼女の髪を検査したことで本人と判明

そして、彼女の経歴

次元犯罪者 ジェイル・スカリエッティの元で誕生

聖王教会、ミッドチルダ地上本部への潜入

同地上本部でのレジラス中将の殺害

とそこまでの経歴は良いとして

エクセル「君が宿していたあの黒いのは、何なのか知ってるか…？」

ドゥーエ「さあね、気づいたら生きてたし…あの黒いのは……
ー知らないわ」

フェイト「知らない…？」

ドゥーエ「わからないのよ…体の中で、いつの間にか大きくなって
乗っ取られてた。」

なるほど…あの力は、そういうのだったのか

だとすれば、感染と考えるか取り憑いたと考えるか

プシユー

????「失礼する。」

小柄な銀髪の少女が、医務室に入ってきた。

ドゥーエ「あら お懐かしい顔…」

????「ドゥーエ姉様、お久しぶりです」

その少女の名はチンク・ナカジマ。元ナンバーズで、ドゥーエの妹
にあたる

ドゥーエとチンクが喋っているなか

エクセル「なあ、フェイト…」

フェイト『ん…?』

エクセルとフェイトが思念通話で話しかけある提案をした

エクセル『じゃあ、決定だな』

フェイト『うん』

エクセル「なあ、ドゥーエ。今のお前に聞きたい」

ドゥーエ「えっ………?」

エクセル「今のお前が罪を認めるなら、チンク達と暮らす気はないか?」

ドゥーエ、チンク「!?!」

ソラ「しっ、執務官!?!何を言ってる……」

ドゥーエ「本当にいいの?」

ソラの口をドゥーエが抑えた

エクセル「ああ、君が罪を認めるならな。それが俺とフェイトでの最終決定だ」

ドゥーエ「……いいわ(笑)」

それから3日間、ドゥーエに対する裁判と短期間教育プログラムが行われ、名前をドゥーエ・ナカジマへ改名した。

そして「……………」。

「フェイトの執務室」

フェイト「これがIDとミッド語の読み方の本」

フェイトが机の上に2つのIDカードと一冊の本が置かれた。

このIDが誰のかつて？

もちろん、あの二人に決まってる

フェイト「階級は二人同じ、三等陸士。配属は、一応なのは教導隊かな」

フェイトの前にいるのは陸士制服を着たアリサとすずかが立っていた。

この騒ぎが落ち着くまで、管理局で保護すると同時に管理局への一時入局という形になった。

ミッドに慣れない二人には、なのはのいる教導隊でミッドチルダでの決まり等を習いにいく。もちろん仮配属だけど

アリサ「なかなか慣れない制服ね……」

フエイト「その内慣れるよ（笑）でも良かった。大学の方が研修期間で」

すずか「来年までには落ち着くかな？」

フエイト「それは…わからないけど、どうにかしないと」

ーエクセルの執務室ー

ピッピッピッー

エクセル「……………」

ピッピッピッピッピッピッー

エクセル「出現数が日に日に増えていく一方か…はてさてどうしたものか」

最近の報告書には、特に目立つ所はない

ただ気がかりなのは、この黒い“影”

画面に表示されたのは、異形な形をした影

その形は、人間だったり動物だったりと場所によって姿を変えている

エクセル「こういう時、一番深く考えるのは…アイツしかいないかな」

エクセルは自分のデバイスを取り出し

「もしこれが始まりに過ぎなかったら…俺は…それをただ防ぐ…
それがこの剣を受け継いだ使命なのかな」

ーミッドチルダ海上ー

調査隊旗艦 ヴォルフラム

同 司令部

「????」……………」

肩までセミロングヘアの女性は、司令室中に表示された画面を見
渡していた。

すると、司令室のドアが開いた。

入ってきたのは銀髪の女性、目の色は真っ赤

その女性は、持っていた資料を片手で持ちながら
画面を見渡していた女性に声をかけた

「????」失礼します司令。記者会見のお時間なので、お支度をー
ーー」

「????」うん。わかってるよ、ちょうど見終わったところや」

画面を消し、ヴォルフラムの司令で元機動六課部隊長である 八神
はやては、入ってきた女性に振り返った。

コートを着て、一緒に司令室を出る

はやて「やっぱり秘書官にピッタリやなリインフォース（笑）」

リインフォース「ありがとうございます。司令…いえ、我が主」

廊下を歩きながら、何気ない会話をしていた

はやては、今騒がせている事件に関して

心の中で、ひそかに計画を練っていた

第2話 入局（後書き）

―次回予告―

なのは「アリサちゃん達がミッドに暮らしはじめて3日。大変な毎日だけど、しょうがないよね（笑）」
さて、黒い獣を追い求めて管理世界を行き来するエクセル達、やっぱり簡単にはいかないみたいだね

次回 敵？

TAKEOFF!!」

第3話 敵？

―第2管理世界―

燃え盛る港で、少女は一生懸命走っていた。

少女「ハア、ハア、ハア！！」

その後ろから数匹の黒い獣が少女を追い掛けていた。
少女は倉庫を曲がり、裏へ入っていく

黒い獣「シヤアアア！！」

黒い獣が倉庫の屋根を飛び、少女の前へ回り込んだ。

少女は、立ち止まり来た道に戻ろうとした。

だが、後ろからきた黒い獣に挟まれてしまった。

少女「い、いやぁ……」

黒い獣が少女を追い詰めていき、少女は壁に背中をつけた。

黒い獣が少女へ襲い掛かろうとした瞬間

タタタッ！！

倉庫の屋根から誰かが飛び降りてきた。手に持っていた銃から魔力弾が放たれ、襲い掛かろうとした獣に数発撃ち込んだ。

撃たれた獣は地面にめり込み、降りてきた人物はその近くにいたもう一匹の頭を踏んで着地した。

黒い獣「キシャー!!」

???「遅いッ…!!」

その人物の声は女性のものであった。声は辺りに響きわたり、走ってきた一匹にオレンジ色の魔力弾を食らわせ、後ろからきたもう一匹にも撃ち込み、その場にいた黒い獣は全滅した。

???「ふう…」

女性は少女へ近寄り、手を差し出した。

???「もう大丈夫よ。さあ、一緒に避難しよう」

少女は差し出された手を握ろうとした

瞬間—————

黒い獣「シヤアアア!!」

一番最初に倒した黒い獣が女性へ飛び掛かった。

だが、それより速く女性の体が反応し

銃がナイフへと変形し、黒い獣の胴体を斬り裂いた。

??? 「大人しく寝てなさい…」

少女を抱き抱え、女性は通信画面を開いた

??? 「こちらランスター執務官、少女一名を救出しました」

医療班 了解。2分で救護へりを回します

2分後、救護へりに少女を乗せた。

少女「ありがとう、お姉ちゃん（笑）」

??? 「うん（笑）もう大丈夫だから、安心して」

少女「うん！」

へりが上昇していく。

残った女性は風で揺れたオレンジ色のロングヘアを抑えた。

彼女の名前は、ティアナ・ランスター。

元機動六課のFWメンバーであり、脱獄したジェイル・スカリエツ
ティを逮捕したことで一流の執務官になった彼女もあの黒い影を追
っていた。

ティアナ「ここもボスみたいな奴はいないみたいね…エクセルから
報告があつた黒い影は人に取り憑くみたいなさ…本当なのかしら」

ー翌日 ミッドチルダー

同 高町家

キャスター 第2世界で起こった火災の原因は、未だわかっておらず管理局調査部の方では「……………」

朝のニュースを見ていたヴィヴィオは、パンをかじる。

なのは「ヴィヴィオ、早くしないと間に合わないよ」

食器を片付けていたなのは。その隣には、アリスとすずかがてきぱきと片付けを手伝っていた。

アリスとすずかは、入局の間はなのはの家で暮らすことになっていた。

ヴィヴィオ「はぁい。モグモグ……………」

記者A では、調査隊司令の八神はやて一佐にお話を伺いたいと思います

はやて、という名前に反応した一同はテレビを見た。

はやて 調査隊司令の八神はやてです。

はやての隣には、リインフォースが座っていた。

記者A 最近こういう事件が多発していますが、司令としてのお考えは…？

はやて そのことに関しては、まだ何とも言えません。日が経つに

つれ、数が増えていく一方でこちらとしても、現地局員との連携が必要なのです

はやての冷静な眼差しが、カメラを射ぬいていた。

記者B では、これからの対策は

はやて 私としての考えはありますが、まだ時期ではないと言っておきます。

記者C 時期とは？

リンフォース これ以上のお話は、口外出来ません。

アリサ「はやても大変ね〜」

なのは「しょうがないよ、司令なんだから」

全員が家を出て、それぞれの場所へ向かう。

ヴィヴィオは学校

なのは、アリサ、すずかは部隊へ

なのは「じゃあ、ヴィヴィオー〜」

ヴィヴィオ「うん」

分かれ道で親子二人はお互いの手を叩き、別れた。

学校へ向かうヴィヴィオの後ろを同世代と思わせる格好をした人が

走って行った。

1 St. (ザンクト) ヒルデ魔法学院1

初等科・中等科棟

学生達が校舎へ歩いて行く中にヴィヴィオの姿があった。

ヴィヴィオ「あつ、アインハルトさあ〜ん」

ヴィヴィオが声をかけたのはツインテールでエメラルドグリーンの髪をした少女のアインハルト・ストラトス。

アインハルト「ヴィヴィオさん……………」

アインハルトが振り返った。一年前、ヴィヴィオとアインハルトはとあることがきっかけで知り合った少女だ。

実は彼女とヴィヴィオには断ち切れない因縁がある。よく見れば、アインハルトはヴィヴィオと同じく両目の色が違うのだ

ヴィヴィオ「おはようございます」

アインハルト「おはよう。皆さんは元気…?」

ヴィヴィオ「はい、ママ達は忙しいんですが元気です（笑）」

ヴィヴィオがにこやかに微笑んだ。アインハルトは薄く笑い、二人で校舎へ入って行く

半年前の事件にアインハルトが出てこなかったのは、別世界へ行っていたからだ。

アインハルト「では、また放課後に」

ヴィヴィオ「はい」

小中違う校舎の為、別れる二人

????「聖王と霸王が一緒にいるなんて、笑える光景ー」

ー教室ー

ヴィヴィオ「おはよう。リオ、コロナ」

教室に入ったヴィヴィオは、親友である二人に挨拶した。

リオ「おはようー！」

コロナ「ごきげんようヴィヴィオ」

ツインテールの髪型がコロナ、短髪の子がリオ

この3人は、幼い頃のなのはやアリサとすずかを思わせるほどの仲だ。

先生「転校生を紹介します。」

教室に金髪のセミロングヘアの少女が入ってきた。

サラ「サラ・ミスズです。よろしくお願いします」

先生「サラさんは、病弱ですので皆さん、いたわってください」

とりあえず、自己紹介を終えヴィヴィオを先頭にサラへ詰め寄った。

ヴィヴィオ「サラさん、高町ヴィヴィオです！友達になりましょう
！！」

サラの慌てふためく姿を見て楽しかったのか、ぐいぐい詰め寄ってきてサラの手を握ったヴィヴィオ

赤くなりながら、サラとヴィヴィオの目が合った。

ツキンッ！

サラ「……………」

ヴィヴィオ「……………!？」

ヴィヴィオは手を離れた。次のクラスメートが話し掛けた

ヴィヴィオは横からサラを見た。胸元を触るヴィヴィオを見たりオとコロナは

リオ「どうしたの…？」

ヴィヴィオ「……………」

コロナ「ヴィヴィオ…？」

ヴィヴィオは胸元を抑えたままだった。

ヴィヴィオは、胸の中で締め付ける痛みを気にしていた。

―魔法学院 校門―

……………昼頃

エクセル「ここが…ヴィヴィオのいる学校か」

私服のエクセルは校門をくぐり、校舎へ入っていく

先生「すみませんが、どちら様ですか？」

職員室で先生に素性を聞かれ、エクセルは執務官カードを見せて

エクセル「時空管理局執務官のエクセル・アーシュライトです。高町ヴィヴィオさんにお会いしたいのですが」

―数分後―

ヴィヴィオ「ごきげんよう、エクセルさん」

エクセル「ごきげんようヴィヴィオ。」

ヴィヴィオの後ろにリオとコロナがいた。

リオ&mp;コロナ「こんにちは〜（笑）」

エクセル「こんにちは（笑）」

場所を移動して、図書室へ

エクセル「ヴィヴィオの権利で無限書庫のデータを俺の端末へ送ってほしいんだ」

ヴィヴィオ「構いませんが、何のデータを……」

エクセル「古代ベルカ時代を含め悪霊、憑依の事件と記録辺りかな」

その二つの単語を聞いた3人は一瞬だけ後退りした

エクセル「あつ、いや、決して変な意味はないからな」

ヴィヴィオ「はっ、はい……」

ヴィヴィオが端末を開いて文字を打っていく

ヴィヴィオ「司書名、高町ヴィヴィオ。認識コード8781、検索ワードーーーーー」

エクセル「おっ、きたきた。ありがとうヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「いえいえ」

ー放課後ー

放課後までいたエクセルは、ヴィヴィオ達を車に乗せた。

アインハルト「すみません、私まで」

助手席に乗ったアインハルト。

エクセル「構わないよ。通り道だし…君とも話してみたかったから、ヴィヴィオが好きな友達のことをさ」

ヴィヴィオ「え、エクセルさん!!」

赤くなるヴィヴィオを笑いながらエンジンをかけ、車を走らせ学校から離れていく

エクセル「ヴィヴィオ…本当にここでいいのか？」

リオとコロナを送った後、残るヴィヴィオとアインハルトを送るだけなのだったのだから、ヴィヴィオは用事があるだとかで途中で降る

すことになった

ヴィヴィオ「大丈夫です。家も近いですし、大した用事じゃないですから」

ヴィヴィオがドアを閉め、アインハルトを見た

ヴィヴィオ「じゃあアインハルトさん、また明日」

アインハルト「また明日……」

車がヴィヴィオから離れていく

ヴィヴィオ「さて……………」

ースポーツ公園ー

ヴィヴィオ「ふう……」

大人モードで魔法の練習していたヴィヴィオ

ヴィヴィオ「ねえ、クリス…収束系の練習してみようか」

ピシッと手を上げたクリス。ヴィヴィオが砲撃陣を展開し目を閉じる。

収束魔法…なのはママと戦った時に無意識に使ったけど、今はどうなんだろう

ヴィヴィオ「ハアアアア……………!!」

虹色の魔力光が収束していく

すると突然――

??? 「古代ベルカ聖王オリヴィエの末裔、高町ヴィヴィオとお見受けします。」

ヴィヴィオ「!!!?」

虹色の魔力光が消え、ヴィヴィオは振り返った。

電柱の上にバリアジャケットを装着し、バイザーをかけた女性が立っていた。

ヴィヴィオ「誰ですか…?」

??? 「倒される人には名乗らないのが私の主義です…」

するといきなり、女性が消えヴィヴィオの懐に現れた。

ヴィヴィオ「あッ――!!」

女性の拳がヴィヴィオに向かっていく

ガシッ!

ヴィヴィオは女性の拳を弾き、ステップを取りながら後方へ下がった。

ヴィヴィオ「いきなり何をー」

シュツ

また相手が一瞬で間合いに入ってきた。さすがに今度はヴィヴィオも反撃が出来た。自分が得意なカウンターだ

ヴィヴィオ「リボルバースパイク!!」

ヴィヴィオの上段回し蹴りが相手の顔を捉えバイザーを弾いた。

???「ツ…!」

相手の驚くのがわかった。ヴィヴィオは距離を離し、バリアジャケットを装着した。

バイザーが外れ、素顔が見えた。月の光に照らされた相手の顔は、どこかのお嬢様を思わせる顔立ちで髪は金、目は自分と同じドットアイ。

???「……………許さない」

女性は傷がついた左頬を撫でると、周りの雰囲気が一変した。

黒い影が地面をおおい、五体の黒いピエロが片足に、片腕に剣をつけて現れた。

ヴィヴィオ「!?!」

???「私の顔に傷をつけたことを後悔させてやる!?!」

女性の怒号で、黒いピエロがヴィヴィオへ斬り掛かった。

ドンー!!

ヴィヴィオはそれを避け、後ろから来たピエロを殴り飛ばす。

黒いピエロ「キエエエエ!!」

ピエロが吹き飛び、ヴィヴィオは別のピエロと対峙した。

ヴィヴィオ「アアアアア……ッ!!」

避けたピエロの剣を掴み、他のピエロを弾き飛ばし掴んでいたピエロを投げる。

ヴィヴィオ「残ったのは……」

ヴィヴィオは後ろにいた女性へ振り返り、身構えた。

「……やっぱり、雑魚がいくら掛かっても無駄なことね」

女性は懐を探り、銀色の何かを取り出した。

「……「リーヴォルフ」」

そう女性が口にすると、黒い光が女性を包み手足に銀色の鉄鋼のパーツを装備した。

ヴィヴィオは目を疑いづつも、構えを解かなかった。

「……このヴォルフは、ビルをも砕く……」

女性が腕をくねらせた。ヴィヴィオにはその動きが攻撃の合図と悟り、両腕に魔力を込めた。

「……遅い!!」

女性の動きが先程より遙かに速かった。

驚愕したヴィヴィオの下から突然、拳が現れ顎に食らった。

ヴィヴィオ「ガッ……!!!!?」

体が宙を飛び、とてもない痛みがヴィヴィオを襲った。宙を舞ったヴィヴィオの上に女性が跳躍し右腕を振り上げた。

「……獄王流」

右腕に装備された鉄鋼のパーツが黒く輝き、ヴィヴィオへ振り下ろされた

「……獄門拳」

振り下ろされた拳がヴィヴィオの胴体へ食い込み、そのまま地面へ物凄い勢いで叩きつけられた。

「ダアアアアーン!!」

地面に薄いクレーターが出来た。ヴィヴィオは頭と口から血を流し、

クレーターの中心で横たわっていた。

女性は、装備していた銀色のパーツを消し、ヴィヴィオに背を向けて公園を出ていった。

ーアインハルトの家ー

時間帯は19時を回っていた。

サアアアアア

シャワーを浴びていたアインハルト。

アインハルト「ふう……………」

浴室から出て、タオルを取ったアインハルトへ

ズキッン！！

アインハルト「…ッ!？」

急に襲った胸の痛み、アインハルトは膝をついた。

アインハルト「な…にッ……………」

ふらふらと立ち上がり、タオルで体をふいた。そんな彼女に近寄る小さなぬいぐるみ（猫みたいな豹）のデバイス、アステイオン。愛称 テイオは鳴きながらアインハルトに近づく

ベッドの近くまで来ると、胸の痛みの理由がわかった。

アインハルト「通信……？」

発信者はヴィヴィオだった。アインハルトは嫌な予感と感じながら通話のボタンを押した

画面が表示され、ヴィヴィオが映った。

アインハルト「ヴィヴィオさん……！？」

アインハルトは大人モードのヴィヴィオの顔を見て驚いた。それもそうだが、映し出された顔は口と頭から血が出ていたのだから

ヴィヴィオ すみ……ませ……ん。急いで……スポー……ツ……公園まで……来てくれ……ますか

かすれかすれの声で、アインハルトに場所と状態を伝えた。

アインハルトは急いで服を着替え、ティオと一緒に家を飛び出した

ースポーツ公園ー

アインハルト「ハア……ハア……ハア……！！」

ここまで全力疾走してきたせいか、息継ぎがづらい

公園に入り、辺りを見渡すとティオが小さな穴クレーターを見つけた。

中心には、大人モードが解けていたヴィヴィオがいた。

アインハルト「ヴィヴィオさん…！」

ヴィヴィオを背負って、ベンチに横たわせる。

アインハルト「ひどい……………」

顎、腹部への強力な打撃とクレーターができるほどの強い破壊力。
アインハルトは聞かされたことを総合して考えながら、ヴィヴィオを見て救急車を呼んだ。

―病院―

治療室で治療中のヴィヴィオ。部屋の前には、なのは、アインハルト、エクセルがいた。

エクセル「すまない、俺があの時……………」

なのは「ううん。気にしないで……………」

アインハルト「……………」

アインハルトは考え事をしていた。

ヴィヴィオのバリアジャケットを貫通するのは、自分はもちろん母親のなのも簡単には出来ない。そもそも、自分の武装化とヴィヴィオのバリアジャケットは大いに違う所がある

ヴィヴィオのバリアジャケットは、今は失われた古代ベルカの聖王オリヴィエが使用していた防御特有スキル『聖王の鎧』と現代の技術を融合して作ったもの

それを無視して、ヴィヴィオの体へダメージを与える。

アインハルト「……そんなことって」

――1時間後――

ヴィヴィオ「ママ、本当に……ごめんなさい」

治療室から出て、移動用のベッドに横になっていたヴィヴィオは頭に包帯を巻かれたヴィヴィオはなのはに謝った。医師によると、顎へのダメージはそれほどでもないのだが、体へのダメージは歩けないまでに達していて、集中して治療すれば全治1週間だそうだ。

なのは「ヴィヴィオが無事なら、許してあげるよ（笑）」

――病室――

エクセル「ヴィヴィオ、襲ってきた相手はどんな奴だった？」

ヴィヴィオは頬に指をあて

ヴィヴィオ「えっと……女の人で私の大人モードくらいの身長で、髪の色は金髪、顔立ちはお嬢様みたいでした」

ふむふむつと顎に手をあてるエクセル。

エクセル「他にあるか…？変わった様子とか」

ヴィヴィオ「私のこと良く知ってたみたいだし、なんか黒い影からピエロが出てきたり……」

エクセル& amp;：なのは「!？」

エクセル『なのは…』

なのは『うん…』

二人は部屋を出て、屋上で通信をしていた。

はやて ヴィヴィオが接触した人物は、事件の関係者と考えるのが妥当やろうね

エクセル「あれが人の仕業……か」

なのは「そうだね。」

はやて ……じゃあ、そろそろ奇跡の部隊カードが必要な時かな
く（笑）

エクセル「奇跡の部隊カード？……はやて、まさか……」

はやて 人の仕業とわかれば、管理局側が手を打つやろうけど、まだ謎が多い敵とまともに戦えるのはウチらだけや…なのはちゃん、エクセルくん…新しい戦いの火種にならんよう、頑張っていこう！

第3話 敵？（後書き）

ー次回予告ー

はやて「さあさあ、次回予告いっくよ〜」

はやて「ヴィヴィオが襲われて三日。場所は変わって、边境世界へエリオ、キャロがいる部隊へフェイトちゃんが赴いてー！ー！すると、そこに変な男の人がー！ー！」

作者「変な次回予告するなー！ー！！

次回 森林の誘惑者」

はやて「誘惑者やて！？まさかエクセルくんか！ー！」

エクセル「そんなわけあるかー！ー！！」

第4話 森林の誘惑者（前書き）

エクセル「まだ全員を集めるには無理だ。まずは隊長陣を集めた方が手っ取り早い」

エクセルの言葉で、はやてから奇跡の部隊カード

「六課」のカードが上げられた。

再び、機動六課の出番がやってきた

最強で奇跡の部隊である「機動六課」改め特務部隊「特務六課」の新設立

時はまだ――――

第4話 森林の誘惑者

ーミッドチルダ市街地ー

午前8時

スバルの住むマンション

ピンポーン

部屋の前で、呼び鈴を鳴らしていたティアナ

ピンポーンピンポーン

だが、何度鳴らしても彼女の声が聞こえない

ティアナ「いないのかしら…」

クロスミラージュ《いえ、マツハキャリバーが室内で反応してくれました。鍵は空いています》

ガチャツッ!

ティアナはドアを開けた。

ティアナ「スバル…入るわよ?」

ヒールを脱ぎ、部屋へ踏み出した瞬間

シュルツ

ティアナは何かを踏んで、足を滑らせた。

ティアナ「ふあつとと！…なに、これ？」

ティアナは踏んだものを拾った。それは薄い布だった

ティアナ「……って下着じゃない」

室内が暗いせえか、ちつとも気づかなかった

ティアナ「スバル…？」

部屋が真っ暗だ、カーテンも開けてない。

ティアナ「カーテンも開けないで、だらしない…」

シュン

カーテンを開け、振り替えると床には

ティアナ「い…いやぁー！…！！」

ティアナの絶叫がマンション中に響き渡った。

それもそうだ。ソファアの近くでスバルが目を開けたまま倒れていたのだから

ティアナ「スツ…スバル？ねえ……嘘でしょ！？」

ティアナがスバルを擦った。もちろん反応がない

ティアナ「スバル！スバル！！起きなさいよスバル！！！」

涙目になったティアナがスバルの耳の近くで叫んだ。すると――

スバル「んう………」

ティアナ「え………？」

スバルが目を擦りながらムクリと起き上がった。

ティアナ「ス……スバル………？」

スバル「あれえ〜ティア〜？……ふあ……はあ〜」

スバルが大きなあくびをした。

スバル「ゴメ〜ン。2日間連続で働き詰めだったからか、寝てないんだよ〜」

スバルは目を擦った。半分しか開いていない瞼が再び閉じようとしていた

ティアナ「……………」

スバル「……………」

ぶるぶる震えていたティアナは、持っていたバックを床に落とし

「脅かすんじゃないわ…よー！ー！！」

バシーーーーン！！

スバルの頬におもいつきり振りかぶった強烈なビンタを食らわせた。

スバル「ふわっ…！！？」

スバルは完全に両目を開け、涙目で赤くなった頬を触れながら「なんで打つの？」という目でティアナを見た。ティアナは我慢出来なかったのか

ティアナ「大体鍵は開いてるわ、下着は脱ぎっぱなし！！」

ベシベシベシベシ！！

さらに多くの往復ビンタで、スバルの頬を叩きまくるティアナ

ティアナ「おまけに目を開けながら寝てればッ…！！」

最後には大きく振りかぶり

ティアナ「誰だって驚くわよーーーー！！！！」

ベシーーーーン！！

トドメのビンタで、スバルは床に倒れた。

スバル「…ごめんなふぁーい（泣）」

床で泣きながら謝罪するスバルであった。

ティアナから制裁を食らい、完璧に目が覚めたスバルは腫れた頬を氷で冷やししながら、六課のカードが上がったことを聞かされた。

スバル「じゃあ、また隊舎に集合するの…?」

ティアナ「今回ばかりは隊舎は使えないから、主に航行艦がメインね」

スバル「じゃあ私とエリオとキャラロがティアの航行艦に乗るってことだね」

ティアナ「まだわからないけど、今頃フェイトさんが二人を迎えに行ってる所よ」

「その頃、フェイトは」

フェイト「クシュン…!」

草原でくしゃみをしたフェイトは、キャラロとエリオがいる隊の場所へ着く所であった。

フェイト「誰か私の噂してるのかな…?」

と言っている内に、フェイトの体に大きな影が被った。フェイトは空を見上げると、そこには————

????「フェイトさあ〜ん」

大きな飛竜だ。その背中から可愛らしい女の子の声が聞こえた。

フェイトは見知った飛竜と背中に乗っていた声の主に微笑んだ。

フェイト「キャロ」

????「フリード、フェイトさんの所に降りよう」

飛竜がフェイトの所へ降りて行く。翼をはばたかせ、フェイトの前で足をつく飛竜。フリードの背中から、ピンクの髪をした小柄な少女が降りて、フェイトに駆け寄ってきた。

フェイト「キャロ、元気だった？」

この少女の名前はキャロ・ロ・ルシエ。フェイトの大切な家族の一人で、フリードはキャロが使役する飛竜であり、キャロの生れ故郷を守護する飛竜の一頭である。

フェイトに頭を撫でられるキャロは

キャロ「はい！私もロツジにいるエリオくんや皆さんも元気です（笑）」

フェイト「良かった」

ー環境保護隊 ロツジー

エリオ「フェイトさん、そんなに撫でないでください／＼／＼／＼／」

ピーピー！

三人「!?!」

隊長「何者かがセンサーに引つ掛かった」

パットを操作しながら、場所を表示した。

森林の奥深い所だった。

キャロ「エリオくん！」

エリオ「うん！」

二人が外に出て、バリアジャケットを装着する

フェイト「二人共、気をつけて！」

二人「はいッ！」

エリオとキャロが大きくなったフリードに乗って空に上がっていく。月に照らされ、フェイトはバルディッシュを取り出す

隊員（女）「執務官！センサーに複数の反応が!?!」

フェイト「監視サーチャーの映像を私に！二人を手助けします!?!」

バリアジャケットを装着しバルディッシュを片手に空へ舞い上がった。

「?????」

暗い森林の中で、そいつは歩いていた。

その上空にフリードが到着した。

そいつは、フリードを見上げる。

「?????」「アルザスの飛竜……」

声は男の者だった。男は一瞬だけ笑った。

キャロ「止まりなさい！ここは保護区域に指定されています！部外者は立ち去ってください！！」

キャロがフリードから通告すると、男の周りに小さな黒い竜が三体出現する

男「さあー」

男が「襲え」と言おうとすると、森林の中から

エリオ「ハアアアアア！！」

ザシユザシユ！

ストラダを持ったエリオが現れ、瞬時に三体の黒い竜を両断し男に矛先を向けた

男は一瞬だけ驚いた表情をするが直ぐに元の表情に戻る

男「ほお…」

エリオ「保護区域への不法侵入、及び現地保護隊に対する攻撃行為は犯罪です。よって、あなたを逮捕します！」

男「立派なものだな、エリオ・モンディアル」

エリオ「!?（こいつ、なんで僕の名前を…）」

男「なんで、僕の名前を…か？」

男はエリオの思っていたことを口にした。エリオはさらに警戒した

男「お前はまだ、自分の立場をわかっていないようだな」

エリオ「……どういう」

すると、エリオの周りから先程の黒い竜が六体が現れ、上空のフリードに向かっていく。

エリオ「キャロ…!」

エリオの目線が男からキャロへと移った。

キャロ「フリード…!」

フリードが上昇し、黒い竜から距離を離そうと移動する

エリオ「……お前…!」

エリオが振り返ると、男がエリオに剣を振り下ろそうとしていた。

キンッ！

振り下ろした剣をストラダで受け止める。

男「面白いな…いい反応をしている。だが—————」

男はストラダを弾き、エリオを蹴り飛ばす。

エリオ「あまく…！」

蹴り飛ばされたエリオは後ろにあった木を軸に、ストラダのブースターを使い、再び男に突撃する

エリオ「見るな————！」

カートリッジをロードし、エリオとストラダがさらにスピードを上げる。

エリオ「スピーアアングリフ——！」

ブースターによる突撃攻撃が、男に迫る。だが—————

キンッ——！

エリオ「なっ！？」

男は持っていた剣で、エリオの突撃攻撃を易々と受け止めたのだ。

男「その程度か……」

エリオ「（動かない！？）」

宙に浮いた状態で、エリオは動けなかった。

男「では……終わりにしよう……」

男の左手に突然、槍が現れる。

男「さあ……己の運命に絶望しろ」

男が、エリオに槍を突き刺そうと左手を動かした。

そして、そこへ金色の稲妻が走った。

????「動かないで」

金色の鎌の刃が、男の首筋を捉えていた。

エリオ「フェイトさん……！！」

エリオの足が地面につき、今度は逆に男が動けなかった。

男「……キミかい……フェイト・テストロッサ。まさかこんなに大きくなっていたとは」

男はまるで、フェイトを知っているかのような口調で、後ろにいるフェイトに問う。

フェイト「あなたが何者かは知りません…でも、私の家族に手を出したことは許しません」

男「フフフフ、笑わせてくれるじゃないか…だけど、いいのかな？自分のことは心配しなくて……」

フェイトの後ろに黒い小さな竜が現れ、フェイトを襲おうと牙を向いた

バルディッシュ《ソニックムーブ》

フェイトは竜の後ろに高速移動し、バルディッシュを振るった。

フェイト「ハアッ！」

竜を斬り裂き、地面に着地する。だが、斬り裂いた竜の体がバインドとなり、フェイトの体は近くにあった木へ拘束した。

フェイト「あっ！？」

気づいたら、エリオもバインドで抑えられていた。

男「あつけないな、雷の女神様がこの程度では……」

男はフェイトに近づき、彼女の顎をクイツと手で上げる。その顔はやはり良く見えずにいた。

男「キミはやはり美しい…美貌とその内に宿した力も変化がない。だが、自分の運命を知らない…そんなお前を再びものにしたい」

フェイト「なっ、なにを言って!?!」

男はフェイトの腹の辺りに触れり、擦った。

男「だが、さすがにまだ身籠っていないか……また会おう」

男はフェイトから離れ、足元に転送陣が現れる

男「俺の名前はアルザス……この名前を魂に刻み込んでおけ……そして次はもうないと思え」

男は光に包まれた。

フェイト「アルザス……」

一体何者……?私を知ってたみたいだけど……それに、身籠ってないって

フェイトはお腹に触る

まさか……ね

時を同じくして、ミッドチルダの病院にあるヴィヴィオの部屋では、コロナ、リオ、何故か他の人達がヴィヴィオの見舞いに来ていた。

リオ「これが今日勉強した分のノートのコピーと頼まれてた本……」

リオがヴィヴィオの前にあったテーブルにドサツと紙の山を置いた。
ヴィヴィオ「うーん…なんか多くないかなあ〜（汗）」

コロナ「大丈夫だよ。はい、本」

あれから起き上がれるようになったヴィヴィオは、リオとコロナに頼んで授業のノートを取ってきてもらったのだ

???「しかし、ヴィヴィオを襲った奴はヴィヴィオの素性を知ってみたいじゃねえーか」

ヴィヴィオのストライクアーツの師匠であり、N2Rのアタッカーであるノーヴェはヴィヴィオに聞いた

ヴィヴィオ「知ってたというか…なんというか」

ヴィヴィオは渡された本のページをクリスがめくっていく

ヴィヴィオ「不思議な感覚がした。私というより、私の中に眠ってる血…みたいなのが」

ノーヴェ「なあ〜に暗い顔してんだよ、友達の前で（笑）」

苦笑したノーヴェがヴィヴィオの額に軽くデコピンした。

ヴィヴィオ「にゃっ!? もうノーヴェ!」

すると、クリスがちょこちょこヴィヴィオを突いた。

ヴィヴィオ「ん？クリス、見つけたの？」

クリスがコクンツと頷き、ヴィヴィオとノーヴェ達は本を覗き込んだ。

この本は『王朝 家系書』というタイトルである。これは元々、無限書庫の禁書の棚にあった本なのだが、ヴィヴィオがユーノに無理矢理頼んで特別に借りたのである。

開かれたページには、聖王の名と霸王の名を初めとする様々な王家の王の事や名前や家系図が載っていた。

ヴィヴィオは自分を襲ったメルフィスという人物が聖王と関係していると予想した

ヴィヴィオ「え」と…あつた！…えっーーーーー」

ヴィヴィオは自分の目を疑った。あの女の人がいたメルフィスという名前、それは

メルフィス・ヴァンワール

それがメルフィス家の一代目の女の名前だった

そして、その彼女も王の名を受け継ぐ者だった

その名は『魔王』

ノーヴェ「メルフィス・ヴァンワール…魔王と呼ばれた王か」

ヴィヴィオ「ねえ、リオ、コロナ…アインハルトさんは？」

コロナ「アインハルトさんなら、用事があるからって……」

ヴィヴィオ「!?…ダメツ…アインハルトさんは……」

メルフィスに会っちゃダメと言えなかった。ヴィヴィオは本能的に感じたのだ、アインハルトは自分を倒した相手に会うことを

―その夜―

アインハルトは制服のままスポーツ公園のベンチに座っていた。アインハルトは目を閉じ、バックを横に置いていた。

アインハルト「……」

公園には珍しく人がいる気配なくただ、アインハルトだけが存在を許されているようだった。

噴水の音がアインハルトの耳に響いてきた。

すると突然……

バイザーをかけたメルフィスがいきなり背後から飛び掛かってきたのだ

ズバアアアーン！！

メルフィス「なっ!?!」

メルフィスは驚いた。ベンチに座っていたアインハルトが、いつの間にか置いていたバツクを片手に、噴水の傍らに立っていた。

アインハルト「あなたですか、メルフィスという人は……」

メルフィス「さすがね霸王。私の気配を感じ取るなんて……」

バイザーを取り、後ろに投げ捨てるメルフィスはゆっくりと構えた。

アインハルト「あなたがヴィヴィオさんを狙った理由……吐いてもらいます」

アインハルトは持っていたバツクを横に放り投げ、足元に魔法陣がひかれる

アインハルト「いきますよティオ！」

ティオ「にゃっ！」

肩になっていたティオが鳴いた

アインハルト「セット・アップ！」

アインハルトが魔力光に包まれる

魔力光が治まると、アインハルトはヴィヴィオと同じ大人モード、本人は元々武装形態と呼んでいるがこれが彼女の大人モードであり霸王の象徴である。デバイスを持っている今では色々変わった

アインハルト「……勝負です」

アインハルトが構えた。二人は見合い、どちらが仕掛けるか待っていた。

二人「……………」

ザアアアツ！

風が吹いた。

メルフィス「……………!!」

アインハルト「……………!!」

二人が同時に動いた。メルフィスの左から来る拳をアインハルトは右腕で弾いた

上手く近付ければ、一撃で、断空拳で仕留める！

スタンツ！

メルフィス「……………!!」

アインハルトの連撃を弾き、彼女もまたメルフィスの拳打を弾いていた。

アインハルト「ハツ…!!」

アインハルトの拳打がメルフィスを吹き飛ばした。

メルフィス「ぐっ……！！」

吹き飛んだメルフィスは、電柱に叩きつけられた

アインハルト「ハア…ハア…私のカイザーアーツにはあなたの拳で勝つのは不可能です」

アインハルトの言葉にメルフィスは、肩を震わせた。メルフィスは立ち上がり

メルフィス「霸王が私に勝つと……なら、これに勝てるかしら」

メルフィスが銀色の武器、ヴォルフを装備した。

アインハルト「これが……」

メルフィス「聖王を破った私の力、受けてみるがいいわ！！」

メルフィスから闘気を感じ、アインハルトは即座に身構えた。

すると、メルフィスはアインハルトの懐に入り込み、銀色の武器を装備した右の拳がアインハルトを噴水までぶっ飛ばした。

アインハルト「ぐっ…かはっ！！」

アインハルトは噴水の内に体を強く打ち付け、口から血を吐いた。

メルフィスはアインハルトの頭上から、隕石のように落下してきた。

アインハルト「……………!!」

空破弾は間に合わない・・・なら!!

アインハルトは拳を水面に薄く沈め

アインハルト「ハッ……………!!」

彼女は水を素早く腕を動かし、水を斬った。

ザバアアアア……………ン!!!!

噴水にあった大量の水が高く浮き上がり、メルフィスに襲い掛かった。

これは水斬りという。普段は自分の拳と速さの力を測るためのものだ。

この場合、アインハルトは目隠しの為に利用したのだ。

メルフィス「悪あがきを!!」

メルフィスは軽々と水の壁を破り、拳に魔力を集中させる。

アインハルト「……………」

打つんじゃないで貫くんだ、それがこの技の力

メルフィス「ハアアアア……………!!!!」

アインハルト「……霸王」

アインハルトは拳に力を込める。

アインハルト「断空拳!!」

足先から練り上げた力を源に空を切り打ち出す拳は、まさに断空拳である

メルフィス「なっ!?!」

落下してきたメルフィスは空中で弾かれ、数メートル離れた場所に着地した。

アインハルト「ハア…ハア…!!」

地面に両手をつき、バリアジャケットが解けるアインハルト。テイオが近寄って鳴く

メルフィス「……命拾いしたわね」

舌打ちしたメルフィスは銀色の装備を解除し、霧のように消えた。

アインハルト「強い…あれが…魔王の力……」

アインハルトは涙を流した。何故だか自分でもわからない

メルフィスを見ていると、心が痛む。きっと遥か昔に霸王はどこかで魔王に会っているのかもしれない

「?????」

そこは暗い暗い神殿だった。

メルフィス「ただいま戻りました」

?????「ご苦労だったな」

神殿で膝をついたメルフィス。その前では、歪な仮面を被った男が立っていた。

メルフィス「はい……」

アルザス「それにしては随分と体を叩きつけたようだな」

メルフィスは背後に現れたアルザスを見た。アルザスはメルフィスに近寄り、彼女の頬を撫でた。

メルフィス「大丈夫ですわ、アルザス様……」

メルフィスは頬を赤く染めた。

?????「アハハハハハ！」

その横から高笑いと共に、一人の女性が近寄ってきた。メルフィスはその女性を見て、少しだけ気分が悪くなった。なにせこの女は、自分が一番嫌っている女だからだ。

?????「毎度の事ながら笑わせてくれるじゃないかい、メルフィスちゃん」

メルフィス「勝手に笑えばいいわ」

???「あんなちびっこに遅れをとるなんて、アナタも随分と弱くなったものね」

メルフィス「oooooooooo!!!」

???「やめないか、二人とも」

男は神殿の奥で何かを見つめていた。

女性とメルフィスは構えを解いた。

???「まだ我らは目覚めたばかり…それに、覚醒しない羊たちにはそれ相応の魔力が必要になる。」

すると、メルフィスの隣にいた女性はゆっくりと男に近づき膝をついた。

???「ならばその役目、私にお任せを」

???「ほう……」

???「魔力収集に最適な場所がございます…」

第4話 森林の誘惑者（後書き）

―次回予告―

はやて「エクセルくんやなかったか…」

エクセル「当たり前だ…」

フェイト「じゃあ、今私を口説ける？（笑）」

エクセル「フェイトいつの間に！？／／／／／」

フェイト「出来ないの？」

エクセル「いやゝあはは…その、なんというか…恥ずかしい／／／／／」

二人「／／／／／／／／／」

はやて「はいはい…じゃあ次回タイトル行くでえゝ

次回 儂き過去の残像」

エクセル「／／／／／／／／／」
フェイト「／／／／／／／／／」

はせて」「いしまで赤くなるとるんせ……！」

第5話 傳き過去の残像（前書き）

ーベルカ戦乱期 ベルカ陣営ー

それはベルカが戦乱の渦の真っ只中だった。陸では数多くの騎士や魔導士が争い、空は戦艦が飛びかい

戦場ではいつも血で満ちていた。それはいつもの事だった

騎士「申しあげます!!」

伝令である騎士が本陣へと入ってきた。女である王の前で騎士は片膝をつき

騎士「敵軍の奇襲を受け、進軍していた卿の部隊は全て…全て全滅しましたッ!!」

女王の表情は次第に険しくなり、傍らにいた銀髪の女性に話しかけた。

女王「いざというときはお前たちが敵軍を殲滅してこい!…悔しいが、この戦は私の負けだ!!」

???「わかりました。将たちに伝えて参ります」

女性はくるりと向き直り、本陣から出ていく

女王「頼んだぞ、闇の書よ…!!」

闇の書。またの名を夜天の書

後にリインフォースと名付けられる彼女の顔は、いつも暗かった。それは悲しんでいるのか、ただ無愛想なだけなのかはわからないが、本人からすれば普通なのだろう。

リインフォース『我が主より、命令が下った』

リインフォースは本陣の外で、仲間に私念通話を送った。

???『そうか。最初から我らヴォルケンリッターを出せばいいものを————』

念話の相手は烈火の将であるシグナムだ。

リインフォース『すまぬな将。今回の戦は勝てそうにない…だからなおさら、主は我らを“使う”のだろうな』

シグナム『“使う”…か、確かにそう言えるな。だが、今の主では————』

リインフォース『わかっている。その時が来たら、私自らが主を————』

すると突然、横から一人の騎士がリインフォースへ小型ナイフを持って突っ込んできた。

リインフォース「————!?」

敵騎士「覚悟————!」

ザシュー！！

鈍い音がした。

敵騎士「なにッ…！？」

騎士は自分の目を疑った。自分の目の前にいた女は、避けようとせずにはただ、素手でナイフを受け止めたのだ。

リインフォースの左手にはナイフが突き刺さっていた。手からは血が流れ、そして刺さっているナイフを持っている男の手首を力強く握った。

リインフォース「暗殺か…さすがに今のは驚いたーーーー」

男はリインフォースから離れようともがいていた。

リインフォース「ならば、失敗したとあれば覚悟は出来ているな…」

リインフォースはナイフが刺さった手と逆側の手を男の胸に当てる

リインフォース「蒐集」

とリインフォースが呟くと、男の胸に当てていた手に魔力光を纏った球体が握られた。

リンカーコアである。リンカーコアがリインフォースに吸収されると男は絶叫した

リインフォース「ーーーーー」

グシュッ

手に刺さったナイフを無造作に引き抜き、ほおり捨てた。

男の絶叫を聞き付けた騎士達が駆けつけ、倒れた男を連れて行った

シグナム「大丈夫か…？」

リインフォース「問題はない…」

ヴォルケンリッターが出陣し、戦況は大きく変わった。

シグナムを恐れ逃げ出し、ヴィータの攻撃を恐れ自ら命を断つ者もいた。

リインフォース「悲しき戦、悲しき戦い、悲しき我らヴォルケンリッター…一体いつになったら、我らは解放されるのだろうか…」

女王「闇の書、ページは埋まったわね…」

リインフォース「…はい」

リインフォースは闇の書を女王である主に渡した。

女王「これで、私の夢が叶う。この世の全てを手に入れる…！」

女王が高笑いし、闇の書を天高く掲げた。近くにいたヴォルケンリッターの面々は、主を見据えていた。

リインフォースは目を閉じ、悲しい表情を浮かべていた。

女王「さあ、闇の書よ！我、アリス・クシャトリアが願いを叶えー
ー」

ザシュー！！

女王、アリス・クシャトリアの背中を誰かが斬り付けた。

斬り付けたのはリインフォースが操るブラッティーダガーだ。リインフォースは、無表情のまま自分の主を見つめていた。

アリス「なにっ…を！！」

シグナム「黙れ…」

シグナム以外のヴォルケンリッターはもう口すら聞かなかった。

リインフォース「あなたは主に相応しくなかった。ここまで協力してきたのは、闇の書にページを蒐集させるため」

シグナム「今までご苦労だったな…」

アリスは後退りした。

アリス「きつ、貴様、らあゝ！！」

「???」あつ、姉さん、おはようっす」

もう一人は悪魔っ子を印象付ける少女、名前はアギト。ヴォルケンリッターの1人、烈火の将、シグナムをサポートする騎士。またシグナムと同じ魔力性質と私やリイン?と同じスキルである融合フュージョンを用いている。このアギトはベルカ時代に生まれ、永い時の中を生きてきた

その気持ちは、私達は理解出来る。我らが主は本当に恵まれた人だ

リインフォース「主はまだお部屋か?」

アギト「マイスターなら庭でフェイトさん達と通信中ですけど?」

フライパンから焼いたベーコンを皿に分けていくアギト。

リイン「なんでも、アインハルトとフェイトさん達を襲った人物に関して、接点をまとめてみたいですよ?」

(アインハルト…確か、霸王の血を引いていたという人物だったか)

リイン「そろそろ朝食が出来ますので、呼んでくれますか(笑)」

テーブルへ朝食を並べ始めるリイン。

リインフォース「ああ、わかった…」

「庭」

はやて「ヴィヴィオとアインハルトを襲ったのは、メルフィスって

いうベルカ時代の“魔王”と呼ばれた王ちゅうわけで、フェイトちゃんを襲ったのはアルザスって男…」

フェイト《うん…》

エクセル《フェイトの行動を先読みするなんて、どついつ男だよ》

フェイト《顔がよく見えなくて…それに》

はやて「それに？」

フェイト《その男…なんか……ううん、やっぱり何でもない》

しばらく通信が続き、朝食をとった後、調査隊旗艦であるヴォルフラムに向かった。

ーヴォルフラム 会議室ー

リインフォース「第八世界の調査結果は以上です。ご覧の通りに、被害は拡大する一方です」

会議室では、各調査分野の隊長をはじめとするメンバーで対策会議が行われていた。

まずは対策について

出現範囲が広すぎて、調査も含め武装隊の派遣も出来ない。その武装隊に関してもシグナムの隊や知人の隊を動かすにも無理があった。次に、事件発生場所の共通点について

調査班からの報告によると、それぞれの発生場所の共通点は特になし。

リインフォース『イヤな予感がしますね』

リインフォースがはやてに念話を送った。

はやて『そうやね…六課メンバーが動くには船しかないっちゅーのは理解してる。でも、船の手配もままならない……何か手掛かりがあれば…』

その時、ひとつの知らせがあった。

観測班《観測班より八神司令》

観測班から連絡が入ったのだ。

はやて《はやてです。会議中なので、報告は――》

観測班《会議中ならちょうど良い。事件が発生し、敵の体質と現れる原因がわかりました》

はやて『!?!?』

はやてを含め、その場にいた全員が息をのんだ。

会議室の中央に研究室の映像が表示された。研究室の台には必死に捕獲した黒い狼型の生き物がいた

観測班「まずは敵の出現場所で事ですが、今までの現場を整理してわかったのですが、どうやら現場は魔力量が高い場所なんです。」

はやて「魔力量が高い？どういうことや」

すると、事件発生時刻とその前の魔力数値を表す表が表示された。

観測班「これは事件発生現場での魔力数値を表しています。これは発生時刻から一時間前」

表示されている数値は10%となっている

隊長（A）「そんなに高くはないようだが、それが一体どういう関係が・・・」

隊長の一人がボソツと呟いた。確かにこの程度では説明がつかない

観測班「ですが…事件発生の数分前から表していくと」

今度は数分前、先程と変わらない。だが突然、数値が急上昇した。最初はそんなではなかったが、少しすると数値は上昇が止まらず一気に100%へと達した。

隊長（B）「一体なにが起こったのだ!？」

熟年男性の隊長が言った。

観測班《我々も理解不能ですよ…わかるとしたら、誰かが意図的にやったとしか考えられません。もつとも、現代の技術系統では不可能ですが》

リインフォース「……魔力供給弾」

リインフォースが小さく呟いた。それを聞いたはやては……

はやて「リインフォース…？」

リインフォース「古代ベルカに魔力供給弾という物が存在しました」

はやて「魔力供給弾？…魔力を回復出来るってことか？」

念話で会話していた二人に他の隊長たちは気付かない。

リインフォース「はい…私がまだ闇の書と言われていた遙か過去での事です。とある国で私のスキルである蒐集に似せて作り出された大型の弾丸です。それが打ち込まれた地点は魔力供給が自動で行われます」

はやては記憶の中にあるベルカの知識を引き出していた。自分が知っている中で、そんな物は聞いたことがない。

リインフォース「ただ、当時の私のマスターは魔力供給弾の生産をストップさせたのです。その理由は…闇の書が完成したからです」

はやて「あ………」

その後がどうなるかは主であるはやてはよく知っていた。今までリインフォースは闇の書と呼ばれていて、主が変わることに当時のマスターは闇の書の防衛プログラムによる暴走か、あるいは彼女達によるリンカーコアの蒐集による意識不明に陥られたかだ。

リインフォース『もし…この事件に魔力供給弾が使用されているのなら、過去の残りか、あるいは……』

はやて『報告にあった奴らが作っているか』

そして今度は、敵の体質についての説明に入った。

観測班『先程も申し上げたように、魔力量が多い場所にこいつら群がり、吸収するようです。きっとこいつらはそれによって暴れるのでしょう』

魔力を帯びたスフィアを黒い狼に近付けていくと

ギャシユ！

黒い狼が急に暴れ始めた。黒い狼が暴れていると、スフィアが帯びていた魔力を吸い取っていく。

はやて「これは、さすがに危険性は大きな」

観測班『私らからこの敵の名を“ヴァンデビル”と名付けたいと思います』

会議が終わり、はやてはブリッジへ向かっていた。その後ろには秘書官であるリインフォースがついて来ていた

はやて「魔力供給弾の事やヴァンデビルを操っているであろう奴がいるのにも関わらず、地上本部の面々もみんなバカばかりや…！」

はやては魔力供給弾、アルザスなどの事を地上本部に説明していたら、「調査司令なら素早く報告しろ」という事を含め、地上本部の面々に色々と言われたのだ

はやて「ウチだって今朝知ったちゆうに…なあ〜リインフォース？」

リインフォース「えっ！ええ〜確かに…！」

リインフォースはいきなり振られたことに驚き、つい返事をしてしまった。

はやて「今の地上本部に熟年の司令なんかいないし…やっぱりウチらは独断専行やな」

ーベルカ自治領 アルカミナー

ここは元ベルカの国のひとつだった土地。古い建物や建造物が数多く残っていて、この土地はミッドでも有名な観光地だ。

その中心ともなるのがこのアルカミナ城だ。

ベルカ戦争中に突然炎上し、城主も含め多くの兵が死んだとされている。それから復旧後、争いもなく平穏無事な日々が続いていた

そして、ここには――

??? 「久しぶりに暴れましょう……」

女性はアルカミナ城の中に入り、閉ざされた扉へ入っていく。部屋の中は暗く、今まで誰も入っていないような部屋だった

??? 「起動できるかしら……」

中央にあつた機械の起動スイッチを押す。すると、画面が表示された

??? 「ふっ……」

女性は薄く笑い、パットを操作していきスイッチを再度押す

??? 「さあ……暴れなさい」

―街中―

住民たちが行き来する道の中心に突然、フラスコに似た柱が無数に地面から立ち上がった。

驚いた住民たちは柱に近づくと、柱が青白く輝き大量の魔力を放出する

ヴァンデビル（狼）「オオオオオオオン！！！」

地面から無数のヴァンデビルが現れ、フラスコの近くにいた住民を襲い始めた。

人々は悲鳴を上げ、ヴァンデビルから逃げ惑う。

飛び散る血しぶき、獣の遠声がさらに仲間を呼び集める

その事は直ぐに調査隊旗艦ヴォルフラムのはやてへと伝えられた。

ブリッジ局員（男）「アルカミナで巨大な魔力増大を確認！！！」

ブリッジ局員（女）「さらにヴァンデビルが無数に出現！！今までにない数です！！！」

艦長席に座っていたはやては

はやて「ついに動いたか、リイン、第36空戦魔導士中隊にいるヴィータ教導官と連絡を取って合流!!」

リイン「はいです!!」

はやて「リインフォースは首都防衛隊のシグナム一尉に緊急連絡、それと湾岸救助隊に出動要請!!アーシュライト執務官と高町一尉の通信パットを私へ!!」

リインフォース、局員「了解!!」

―第36空戦魔導士中隊―

???「いいか!!これからアルカミナに向かうわけだが、お前らは地上での避難誘導がメインだ!!」

台の上に立ったオレンジ(?)の髪をし幼さが少しだけ残っている少女は、既に出撃態勢に入った部隊に怒号をかわしていた。

彼女の名前はヴィータ。なのはと同じ教導隊であり、八神家の一人だ。

ヴィータ「空に関しては首都防衛隊と連携して抑える!!相手は得体のしれない奴らだが、あたしが鍛えたためえらなら楽勝だ!!どうだ!？」

部隊員一同「サー、イエッサー!!」

部隊員全員が声を合わせて答える。

ヴィータ「よし、出撃だ!!」

ヴィータの号令と共に部隊員一同が空をかけた。ヴィータの隣にいたリインは

リイン「現場の状態は酷いです…教会の騎士団の人たちも頑張っていますが一…」

リインが悲しそうな表情をしていると

ヴィータ「アルカミナか…」

リイン「ヴィータちゃん？」

ヴィータは一呼吸おき、懐から愛機であり相棒でもあるグラーフアイゼンを取り出し走り出す。リインもそれに続き

ヴィータ「リイン！ユニゾン行くぞ!!」

リイン「は、はいですッ!!」

ーベルカ自治領 アルカミナ付近ー

シグナム「アギト、周辺の状況はどうだ…?」

シグナムはアルカミナの上空で愛剣のレヴァンティンを片手に街を見下ろしていた。

アギト「姉御が率いた部隊は後5分、地上は見ての通り…ひでえ有様だ」

シグナムの隣で腕を組んでいたアギト。

シグナム「かつての王国アルカミナ…再び訪れることになるつとは」

アギト「シグナム？ここに来たことあるのか…？」

シグナム「……………昔にな」

空戦に突入し、シグナムと魔導士部隊は乱戦になっていた

シグナム「ハアアアア……………!!」

アギトとユニゾンしていたシグナムは空中にいる様々なヴァンデビルを斬り落としていた。

アギト『これで20体め!!』

シグナム「以前より力強くなっているか……」

カートリッジを装填し、新しい敵を探していた。

魔導士部隊はなんとか敵を抑えている。だが、強力な奴らに襲われ
たらマズい…早く空を抑えなければ

アギト『シグナム、上だ!!』

シグナム「ッ!?!」

上から来たキメラ型のヴァンデビルがシグナムへ爪を振り下ろす。

シグナム「くっ…!!」

レヴァンティンで弾き返す。ギリギリのところだった、レヴァンテ
インの強度を強化していなかったら、自分はやられていた

シグナムはヴァンデビルへと仕掛けた。

ーヴォルフラム ブリッジー

局員（女）「第36魔導士部隊、エンゲージ!!」

エクセル《こちらアーシュライト執務官、間もなく現場に到着する
…!》

局員（男）「了解、城内の制圧を頼みます!!」

リインフォースはくるりとはやての隣から離れ

リインフォース「私も出ます…」

はやて「リインフォース、無茶はアカンで…」

リインフォースに振り返らずにブリッジを出ていった。

はやて「……何を考えとるんや」

「アルカミナ城」

エクセル「ソラ、道のサポートを頼むぞ……」

ソラ《了解です》

城の中をヴァンデビルを斬り倒しながら突き進む。後ろには数人の
局員が付いてきていた。

ソラ《その先に巨大な魔力が発生しています。恐らく、街中に広が
っている魔力の中心と推測されます》

エクセル「了解、外の状況はどうだ。」

出来るだけ外の状況を知っておかなければ、いざという時に対応で
きない。

ソラ《現在、城以外の魔力数値は低下しています。ヴァンデビルへ
の対応の指揮は高町教導官へと移行しました》

なのはか「なら、外の事は任せられるな。エクセル達は目的の部屋
へと突入した」

エクセル「システムか……なら、停止させられる。」

局員達が中心にあったシステムのクラッキングを始める。やがて、システムの動力が停止し城の魔力数値も下がり始めていた。安堵したエクセルはソラへ連絡を取ろうとした。だが――

エクセル「通信が通じない?……ダメか」

通信が通じず、今度は念話を試みるがこれも通じなかった。

その時――

局員「がああッ!!!」

背後から局員の悲鳴が聞こえた。振り返ると一緒にいた局員達がいきなり消えていたのだ。

エクセル「なっ……!?」

俺は咄嗟にデバイスのブランド・ティータに手をかけた。

辺りは誰もいない。あるのは自分の影と黒い点だけだ

ん?…黒い点?

エクセルの目の前にあった黒い点を見た。確か、局員達が立っていた場所……

エクセル「そこかッ!!!」

キンッ!!

黒い点へブランド・ティータを振り下ろすと、黒い点から腕が生え、ブランド・ティータを受け止めた。

????「正解……」

黒い点から女性が現れた。ブランド・ティータを掴みながら、エクセルへ近づいていく

エクセル「ぐっ……!!」

力負けしているエクセルは

エクセル「お前を争乱の容疑で逮捕する!!」

????「余裕なのね……」

女性の回し蹴りがエクセルを襲った。後ろに飛ばされるがうまく受け身を取り、体勢を整える

エクセル「くそっ……!!」

女性の魔力が上がっているのを感じた。

????「答えると思って……?」

ケラケラ笑う女性は、エクセルへ近づいてくる。

エクセルは本能的に悟った。こいつには勝てないと

????「ふふふ……ッ!？」

ズバンッ!!!

突然、女性のいた横の壁を紫の砲撃が貫いた。
煙が立ち上がり奥から誰かが入ってくる。

リインフォース「これ以上暴れるのなら、私が相手をする…」

リインフォースだ。だけど、いつもとは感じが違う

???「お前は…!!?」

どうやら女性はリインフォースを知っているようだ。余裕だった女性の顔がみるみる険しくなっていく

リインフォース「やはりアナタでしたか…アリス・クシャトリア」

リインフォースがエクセルの前に立った。リインフォースが女性の名を口にした

アリス「貴様ツ…闇の書!!」

リインフォース「そう呼ぶのは結構…だが、今の私の名前は祝福の風リインフォースだ。」

アリスは笑った。

アリス「祝福の風？笑わせるな！貴様は祝福ではなく破壊の風で充分だっ!!」

アリスが言い切った瞬間、今度はエクセルの背後から声が聞こえた
???「それは聞き捨てならへんな……」

エクセルは後ろを振り返った。バリアジャケットを装着したはやて
だった

アリス「剣十字…そうか、貴様が……」

はやて「うちは最後の夜天の主、八神はやて…アリスって言うたな、
うちの家族を侮辱したこと…後悔してもらおう」

はやてがシュベルトクロイツを構えた。だがアリスは

アリス「残念だけど、今日は遠慮しとくわ……」

はやて「逃げるんか!!」

アリス「違うわ…正直不利だから引かせてもらっただけ…そちらの黒
服、そんな物騒な代物をむけないでほしいわ」

エクセルは2本の刀鎌を持っていた。するとアリスは闇に紛れたか
のように暗い部屋の奥へと消えていった。

エクセル「逃がしたか……」

はやて「あの女、次会ったときは……」

その翌日

機動六課の隊長陣がはやてのいる船、ヴォルフラムへ集まった。

はやて「本日をもって、うちの部隊は特務課に配属となり“特務六課”と名をかえる！！」

はやてがそう宣言した。

ジェイル・スカリエッティ

JS事件のような大規模な争乱事件を含め、大災害や一番危険な口ストロギアなどを受け持つ特務課、それが俺達の新しい部隊“特務六課”だ

リインフォース「皆には知らせておきたい、今回の首謀者…いや、敵は————」

リインフォースが今から語るのは大きな戦いと苦難の始まりを告げるものだ。それは誰もが理解していることだった

リインフォース「恐らく、過去からの復讐者たちだ……」

第5話 傳き過去の残像（後書き）

―次回予告―

過去からの復讐者たち。それは想像を超えた。

エクセル「って何か勝手に語りだすと止まらないので、次回予告を
パツと済ませます。」

次回 地獄の特訓合宿」

なのは「今回は特訓タイム」

全員「ほどほどにお願いします」

第6話 地獄の特訓合宿

「エクセルの執務室」

エド「特訓合宿…ですか？」

ソラ「しかも異世界でって、いくら何でも急すぎではないですか…？」

まあ、確かにな

いつ敵が来てもおかしくない状況なのに、特訓なんてな

エクセル「たまには鍛えなおすのも魔導士として、または市民を守る管理局局員として、大切だ。士官学校で習わなかったか？凹凸コンビ……」

嫌なことを口にしてしまった。この二人の戦いからして、凹凸なのはわかりきったこと。突撃思考のエドと冷静沈着のソラと…いかに凹凸ではなかるうと組み合わせは組み合わせだ

エド「わかりました！！俺は行きます！！！」

エクセル「ダメだ」

エド「って即答」

エクセルはソラを見つめていた。ソラは口を開かなかった

エクセル「ソラ、来るのはお前だけだ…」

ソラは目を見開いた。

ソラ「自分は……」

エクセル「命令だ……」

ソラは口籠もった

―高町家 付近―

何故だ…何故なんだ……

なのは「ゴメ〜ン、私この型の免許がなくて〜」

なのはの笑顔にエクセルは運転席でため息をついた。またしてもエクセルは運転手を頼まれてしまったのだ

後ろには、ワイワイ騒いでいる女の子たちがいた。

ヴィヴィオ、コロナ、リオ、アインハルト。ついでに何故かドゥーエが乗っていた。

エクセル「こっちは6人か〜」

ソラ「執務官、お待たせしました。」

黒いのが好きで私服姿のソラが荷物を片手に走ってきた。

ドゥーエ「あら〜／＼／＼／＼／」

エクセル「新鮮だな」

ソラが助手席に乗った。ソラの自宅がこの近くな為に本人は直接来たのだ

なのは「じゃあ向こうで（笑）ヴィヴィオたちをお願いね」

エクセル「了解、じゃあ空港でな…」

エクセルは車を走らせた。

パーキングエリア

車を走らせること一時間、空港へはここから二時間ちよつとかかるので全員で昼食タイム…といきたいが

エクセル「デジャビューを感じるな」

エクセルが現在いるのはトイレ、しかも並び待ち

以前にもとある人と一緒だったときも同じ状況だったことがあった。

エクセル「仕方ない…食べてからにしよう」

列を離れて店の中へ、ヴィヴィオたちが席に座ってそれぞれ食事をとっていた

エクセル「さて、俺は何を…ん？」

注文ボタンに気になる文字を見つけた。

麻婆豆腐？……確か、なのは達の世界の料理だったはず……食べてみるか

好奇心でボタンを押し、注文する。

数分後……

目の前に赤い食べ物が置かれた。この中に入ってるのは豆腐かな……でも、この色って

エクセル「パクツ…モグモグ………むぐっ!？」

辛いッ!!なんだこの辛さは………!!

レシートを見てみると“激辛麻婆豆腐”と書いてあった

エクセル「げっ……」

―数時間後 船内―

ここは異世界を行き来する船の中、目的地の世界まで後一時間弱。船内では笑顔で溢れていた

今いるのは八神家、高町家とヴィヴィオの友達、そしてナカジマ姉妹（スバル、ノーヴェ、ドゥーエ）とアリサさんとすずかさん、そして俺とティアナとソラだ。フェイト達は既に目的地へ着いているらしい

楽しいメンバーなんだが……

ガヤガヤ……!!

エクセル「……………眠れん」

一番前という事もあって中々寝れない。苦難していたエクセルに

ソラ「あの執務官……」

エクセル「ん……？」

ソラ「いいんでしょうか、自分なんかに参加して……自分よりエドを……………」

まあ、確かにエドには悪いことをした。けど仕方ないじゃないか……
……あいつは仕事の書類を片付けてないんだからな（笑）

エクセル「お前も少しは学べ。こんな機会は滅多にないんだからな……それに」

エクセルはソラの胸元にあった十字架のアクセサリーを見た。ソラのインテリ型デバイス、ニルヴァーナの待機状態だ

エクセル「お前がこっそり、ニルヴァーナを整備してたのは知ってたからな……」

ソラ「……………」

エクセル「あと、職場以外で執務官って単語はやめてくれ……エクセ

ルでいい」

「辺境世界」

ここはある家族が住む世界。その家族の住んでいた場所は、これはまた偉くこつた設備なんだな

魔法の練習場もあれば温泉もあり、さらにはロッジまであるはつきり言つてこの場所は既に我が物みたいな感じだ。

エクセル「話に聞いてたより広いな……」

すると、ロッジの方から

「……皆さん、お揃いですね」

紫色の髪をした女の子が走ってきた。

ヴィヴィオ「今回もお世話になります」

彼女の名前はルーテシア・アルピーノ。先の事件や様々な事で協力してくれる頼もしい女の子だ。

なのは「ルーテシアちゃん、お母さんは？」

ルーテシア「ママは今、温泉の整備をしています」

すると、ロッジから女性の声が聞こえてきた。俺にとっては一番聞きたかった声だ

フェイト「みんな」

笑顔でロツジから走ってくる女性がいた、フェイトだ。

でも何故か、止まらないような勢いでエクセルへ飛び付いた。

フェイト「エクセル」

ギユウ

抱きついてきたフェイトの腕がうまくエクセルの首を絞めていた、隣にいたソラは啞然とこちらを見ていた。

シグナム「テストアロツサ、エクセルが苦しそうだぞ…」

フェイトは慌て腕を離した。

エクセル「飛び付くなら今度から体にしてくれ、頼むから…」
／／／

フェイト「ゴツ、ゴメンなさい／／／／／」

ソラは未だ啞然としたまま、こちらを見ていた。

はやて「はいはい、イチヤイチャするのはそこまでな…」

スパーン！！

どこから出したかわからないが、ハリセンで叩かれたエクセルとフェイト。

ソラ「あの…エクセルさんとフェイト執務官って……」

ソラは隣にいたティアナに尋ねた、ティアナは苦笑しながら

ティアナ「ええ、そうよ二人は恋人よ／／／／／」

何故かを顔赤くするティアナ。かきあげる髪の間隙からイヤリングが見える

ピシッ！

ティアナ「ん？…ソラ？」

ドゥーエ「石化したみたいね……」

―数十分後―

運動着に着替えた前線メンバー達

エクセル「ソラ、ドゥーエ、ノーヴェ、ヴィヴィオ達の事は頼んだぞ」

準備運動をしながら、ノーヴェ達に言った。

ノーヴェ「大丈夫だよ。ドゥーエ姉もいるし、アタッカーの私だっているんだから…相当の事がなかぎりには呼ばないよ……」

ソラ「僕は入ってないんだ……」

なのは『言い忘れたけど、レイジングハートがブラスターを操作して追尾してくるから、気を付けてね』

なのはが念話を送ってきた。エクセルは咄嗟に背後を振り返った

エクセル「げっ……!!」

確かに追ってきた。

しかも物凄い速さで追ってくる。

なのは『捕まったら罰ゲームだよ』

ばっ、罰ゲームだと!?

エクセル「それを早く言えーーーーーッ!!!」

エクセルは再び走った、追い付かれないように全力疾走だ。やがて、走っていたメンバー達が見えてきた

全員（数人）「ハア、ハア、ハア!!!」

ティアナ「ッ!? 追い付いてきてる!!!」

ティアナの一言で、全員がスピードを上げた。まるで俺を餌にしたかのように

エクセル「おまえら知ってたな!!!」

―スタート地点―

エクセル「ゼエ、ゼエ、ゼエ……!!」

スタート地点でスバル、なのは、シグナム、ヴィータ以外のメンバ
―は地面に膝をついていた。あのフェイトでもだ

ヴィータ「おい、大丈夫か……?」

リン「だっ、大丈夫……ですよ」

へとへとになつたリンやアギト達

シグナム「次に行くぞ……それとも、まだ休むか?」

フェイト「だっ……大丈夫だよ、疲れてなんか……ないよ」

―同時刻 川―

川へ入って腕を水につける。

ソラ「久しぶりに腕を振るうけど……………」

スー……………」

ドゥーエとアインハルトが見守った。

パシャ……………」

ソラ「……………あれ？」

ソラが腕を振るうと、アインハルトみたいに水が斬れなかった。ドゥーエはため息しソラを水から上がらせた

その瞬間だった

ビューーーンズバシュ!!!

水が真っ直ぐに割れ、向こう岸にあった大きな岩が真っ二つに切断された。

全員「……………」

全員がその現象を目撃し、啞然としていた。それをやったソラ本人は、自分の腕を見て拳を強く握りしめた。
。それを見たドゥーエはちょっとだけ顔をしかめた

リオ「あっ、あは、あははははは……………」

リオが笑うと、他のメンバーも笑い始めた。

一方その頃――――

エクセル「こつ、これをやるのか？」

エクセルの前に石垣の壁がそびえ立つ。その高さはビル四階ほどの高さだ

これをロープで登るのだ、しかも所々に障害がある。

フェイト「執務官にとっては必要な訓練だと思うよ？」

エクセル「それは承知してるけど…なんでこの状態で？」

エクセルとフェイトがしょっているのは重さ3キロほどの荷物バック。

フェイト「もうすぐお昼だから、頑張ろう(笑)」

そしてお昼ご飯を食べて、学生メンバーはお勉強タイムとなり、前線メンバーはそれぞれの訓練に入った。

エクセル「こつやって訓練するのもなんだが懐かしく感じるな……」

バリアジャケットを装着したメンバー。俺と一緒に訓練するのは、

シグナムとアギトだ

シグナム「半年前には教えられなかったが、今回は教えられそうだな。私の技を」

エクセル「そうだな。それでシグナム、訓練内容は？」

シグナム「まずは空へ上がる。」

エクセルとシグナムとアギトは、空へ上がった。けどそれほど高くない、地上から100メートルほどの高さだ

アギト「内容は簡単だ。ただ単に……」

シグナム「全てを見分けて受け流せ……」

エクセル「簡単に言ってくれな……」

シグナムが構えたと同時にエクセルも鞘に納めたまま、ブランド・ティータを構える

シグナム「……紫電」

シグナムが動いた。だが……

エクセル「ッ!?!」

シグナム「一閃ッ!?!」

一瞬間光

まさにその通りだった。離れていたシグナムが一瞬で背後に回り込んで抜刀したからだ

エクセル「あつ、危なかった……」

ギリギリで避けられた。一步間違えれば、俺の体は真横に切断されていたとこだ

シグナム「すまん、ついな……」

ニヤリと笑うシグナム。

エクセル、アギト「気を付けろよ……危ないから」

ーロツジー

あれから一時間弱。

ルーテシア「魔王“メルフィス”の伝記は……あつた」

本棚から持ってきた本の表紙を見たアインハルトとヴィヴィオ。

ルーテシア「私も色々調べてみたけど、魔王が歴史上に出てきた痕跡は少なくてよくわからなかったの。その本の中で、メルフィスが出会った人物のほとんどが記されてるはずだよ」

アインハルト「ありがとうございます。」

ヴィヴィオがページをめくっていくと、気になる2つあった

そこにはこう記されていた。

“魔王の姿は誰しも見ることもかなわず、見た者は虚無に帰り、また見た者は異次元の塵と化す。”

アインハルト「理解しにくいですね……」

ヴィヴィオ「でも、理解しなきゃダメですよ」

ヴィヴィオは気になったもう一方を見た。こちらには、メルフィスの出身のことだ

ルーテシア「メルフィスはオリヴィエ皇女殿下やクラウス陛下と身分も近かったし、戦いの中でも数回戦っただけでそんなに関わりはないとも言い難いけれど……」

ルーテシアはページをめくる。そこにはメルフィスの肖像画が載っていた。

ヴィヴィオ「……あれ？」

ヴィヴィオは肖像画を見た途端、脳裏に映像がよぎった。

そこは焼かれた街並みだった

オリヴィエ「メルフィス、あなたがやっていることは民を犠牲にし

ている。それを見過ごすわけにはいきません!!」

メルフィス「オリヴィエ…毎回毎回思うけど、民を気にかけるようなことは王としては必要のないことだと思わない?」

ふざけた物言いにオリヴィエは、怒りを感じた。

オリヴィエ「私は国を統べる王として、民の声を聴くことを第一に考え、行動している。それとは逆にあなたという人は、その民の声を聴こうとしなかった。だから、このような真似が出来た!!」

メルフィス「ふんっ!民なんて、屑の集まりよ。」

オリヴィエ「ッ!」

二人を炎が取り巻いた

ルーテシア「ヴィヴィオ…?」

ルーテシアがヴィヴィオの肩を揺らした。するとヴィヴィオはアインハルトの方へ向いた

ヴィヴィオ「クラウド…?」

アインハルト、ルーテシア「えっ…?」

ヴィヴィオ「クラウドなの…？」

ヴィヴィオはアインハルトの頬へ手を伸ばした。アインハルトは赤くなり、ヴィヴィオの手に触れた

アインハルト「ヴィヴィオさん…私はクラウドではありません。目を覚ましてください」

アインハルトは持っていた本の表紙をヴィヴィオの頬に触れさせた。

ヴィヴィオ「ひゃっ…!？」

ヴィヴィオは驚いて、椅子から飛び退いた。

ガタツ!

ヴィヴィオ「あっ、とっとなっとなっとなっ!?!」

ガシツ!

ルーテシアが転びそうになったヴィヴィオの手首を掴んだ。

ヴィヴィオ「あれ……」

ルーテシア「ヴィヴィオ、何かあったの？」

ヴィヴィオ「えっと…なんかよく分からないんだけど……記憶の断片かな…オリヴィエ殿下の記憶の断片みたいなのが見えてた」

二人は驚いた。驚くは辺りままだ、霸王直系のアインハルトが霸王

の記憶を見るのはわかるが、直系ではないヴィヴィオが見るのは現実的にはありえない

コンコン！

部屋のドアがノックされ、ヴィヴィオ達の視線がドアに向けられた
ドワーエ「お嬢様方々　そろそろスターズの模擬戦が始まるわよ」
「

部屋を出たヴィヴィオ達はリオやソラ達と一緒に訓練場へ向かって
いた

ズオン！！

突然、ヴィヴィオ達の近くに炎の塊が落ちてきた

ソラ「なっ、なんだ！？」

土煙で前方が見えない。ルーテシアとアインハルトが前に出て身構
えた。

土煙が晴れると、目の前にはシグナムがいた。

シグナム「————」

所々、バリアジャケットが焦げていた。

アギト「大丈夫かシグナム？」

シグナム「アギト…ユニゾンしろ!!」

アギト「えっ…!?!」

シグナム「あいつを叩きのめす…」

アギトは一瞬だけ迷った仕草をしたが、シグナムとユニゾンした。

ユニゾンしたシグナムはレヴァンティンを逆手に持ち、空へ舞った。その先にはエクセルがいた、彼はシグナムから逃げるように上昇していった。啞然として見ていたアインハルトたちは我にかえった

「夕方」

ヴィータ「よおし、じゃあここまで!!」

なのは「お疲れ様」

その一言で疲れが出てきたのか、何人かが膝を折った。当然エクセルもだ

エクセル「しっ、死ぬかと…思った……」

まだシグナムがこちらを睨んでいた。シグナムの攻撃を受け流して

エクセル「……っで！！何で、俺がこんな事を……」

現在エクセルは、入浴中の女性陣の近くにいた。飲み物を配りながらだ

ヴィータ「訓練中にミスした罰ゲームだからだよ」

出来るだけ見ないようにしているけど、ヴィータはやっぱり幼児体
……

ゴツ！！

エクセル「んがっ！！」

ヴィータ「てめえ、今幼児体型とか考えなかったか……？」

手をバキバキと音を立てながらこちらを向くヴィータ。反論したくても今の状態じゃあ説得力がない。

シャマル「ヴィータちゃん、はしたないわよ！」

ヴィータ「……まったく」

エクセルは別の場所へ

エクセル「そつ、そういえばフェイトとなのはがないんだけど…」

はやて「二人は明日のセッティング中や」

はやてへ飲み物を渡すと

はやて「エクセルくん、半年前のベッドの中での事覚えてるか？
笑）」

エクセル「……………」

エクセルは顔を真っ赤にした。はやては苦笑しながら、エクセルの下半身をチラ見した。

はやて「あの時はお互いに愛し合ってたけど…今はどうなんやろな
〜(笑)」

さらに真っ赤になったエクセルは素早く飲み物を配り終えて、逃げるように出ていった。

リインフォース「主…あまりいじめない方が」

はやて「なんやリインフォース、エクセルくんを庇うんか？」

リインフォース「そういう訳ではないですが……………」

はやて「さあて〜そろそろ…うりゃ」

はやてはリインフォースの胸を力強く握った。

リインフォース「あつ!?主!?!?// // // //」

「厨房」

アリサ「メガー又さん、スープの方は後3分くらいで完了します」

すずか「炒め物もそれ位には出来そうです」

厨房で手伝いをしていたアリサとすずか。この二人は、今現在風呂場で練り広げられている、はやての暴走を予感して今はこちらの手伝いをしているのだ。

メガー又「悪いわね、二人ともお風呂なのに手伝ってもらっちゃって、それにエリオくんも」

エリオはメガー又の隣で野菜を切っていた

エリオ「女の子たちのお風呂は長いですから、僕はこちらを手伝いをしなきゃ」

するとメガー又は、エリオの耳元でこう呟いた。

メガー又「キャラ口ちゃんと一緒に入ったことあるから?」

楽しそうにエリオの肩を突く。エリオは頬を赤くした

エリオ「いやっ、そのっ、あのっ……// // // //」

メガー又「うふふ、エリオくんをからかうのって意外と楽しいわね

」

そして、風呂場から戻ってきたエクセルが厨房の近くで片膝をつく
アリサ「汗びっしょりだけど……」

エクセル「きつ、気にしないでくれ……」

すると、すずかはエプロンを外してロッジの入り口へ

すずか「なのはちゃん達を呼んでくるね」

ロッジを出ていくすずかを見送り、エクセルはソラがないことに
気付いた。

エクセル「……あれ？」

すずか「えっと……」

すずかは訓練場に行く道を確認して歩み始めた。歩きながら、すず
かは星空を見上げた。

すずか「ミッドの星空も綺麗だったけど、こっちの世界の星空はか
なり綺麗……」

フツと、すずかは歩みを止めた。横にある森の中で、何かがチカチ
カと光っていた

すずか「なんだろ…?」

森に入れる道があったので、すずかは光っている方へ歩いていくと

すずか「あれって…ソラくん?」

すずかは木の影に隠れ、少し先の方に広く開いた場所にソラが白いバリアジャケットを装着していた。両手には刀身の長い双剣が握られていた

ソラ「ハア…ハア…」

ソラはデバイスである双剣、ニルヴァーナを握り練習用のスフィアと格闘していた。だが、ニルヴァーナの切っ先はスフィアをかすれもしなかった

ソラ「くそっ…!!」

ガサガサ…

ソラ「!?!?…誰だ!?!」

ソラはすずかがいた木の方向を向いて怒鳴った。

すずか「ごっつ、ゴメンね。覗くつもりはなかったんだけど…」

出てきたのがすずかで安心したのか、ソラはうっかり構えていたニルヴァーナを下ろした。

ソラ「なっ、何か…用でも？」

すずか「えっと…そろそろ夕食だから、呼びに……ソラくん、ちよっと良いかな？」

すずかはソラへと近づき、ソラの背中へ周り彼の両腕をきっちり掴んだ。

ソラ「なっ、何をッ！？／＼／＼／＼／＼」

赤くなるソラの耳元で

すずか「ソラくんは肩に力が入りすぎてる。だから…いい？こっやつてー！ー」

すずかは掴んだ腕を軽く振るった。すると、先程まで当たらなかったスフィアを余裕で斬り裂いた。

ソラ「！？」

すずか「私に貸してみても…」

ソラがすずかへニルヴァーナを渡すと、すずかはそれを手慣れたように指で回し

すずか「ー！ー！ーはっ！」

ザシュザシュ！ー！

すずかが振るっただけで、スフィアは軽々と四散した

ソラ「すっ、凄い…すずかさん…あなたって一体」

すずかはソラへニルヴァーナを返すと、小さく笑い

すずか「ひ・み・つ」

エクセル「ーーーーーやっぱり、一度試してみるか」

エクセルはソラとすずかのやり取りを木の影で見つ、一言呟くと訓練場の方へ走って行った。

なのは「これで完了だね」

フェイト「うん、明日の試合前にもう一度とチェックして安全確認だね」

バリアジャケットを消し、ロッジへ戻ろうとしていると

エクセル「なのはーーーー！」

エクセルが走ってきた

なのは「エクセルくん？」

エクセルは二人の前で止まり

エクセル「ちよつとお願いがあるんだ」

―翌日―

全員が訓練場へ集まった。何人かは楽しそうに始まるのを待っていた。そして何故かその場にはソラもいた

なのは「じゃあみんな集まった所で、今回の試合のルールを説明します。大人数なので、いくつかのグループに分けたいと思います」

フェイト「メンバーを紹介するね。」

なのはをリーダーとしたチームはヴィヴィオ、ザフィーラ、コロナ、キャロ」

メンバーを紹介した中で、アインハルトはザフィーラを探していた。なのはの方に行ったのは自分の友達と狼が一匹、本人のことを知らないアインハルトはザフィーラが誰かわからないのだ。まさかザフィーラがああ狼だとは知らずに

次はティアナのチーム

アインハルト、リインフォース、シグナム、ルーテシア、リオ

フェイトのチーム

ノーヴェ、スバル、ヴィータ、ソラ、リイン

はやてのチーム

エクセル、アギト、シャマル、エリオ

はやてのチームは一人欠けているが、防御率に関しては最強と言っ

ていい

なのは「ルールは簡単、試合はトーナメント式。各チーム一人一人を公式のライフポイント表で管理、このライフポイントが尽きたら直ぐ訓練場から出てください。ただ、戦い方は色々あるので回復だけ今回もアリとします。後はみんな怪我がないように」

ルールを説明し終わり、対戦相手を決めるためにくじ引きを行う

まずは、はやてのチームとフェイトのチーム

他のメンバーが訓練場から離れる。全員がバリアジャケットを装着した

メガーヌ《それじゃあ正々堂々と…試合開始》

ピッーーーーー!!

開始の合図が鳴った。

スバル「ウイングロードッ!!」
ノーヴェ「エアライナーッ!!」

スバルとノーヴェが空中での足場を作った。

はやて「スバルとノーヴェはウチとエリオが抑える！シャマルは回復に専念。問題はフェイトちゃんとソラくんや、エクセルくんを出来るだけー」

エクセル「その必要ないよ。フェイトとソラは俺が相手をする」

他の場所にメンバーが離れて戦闘をしていた。そんな中、未だ戦闘すらしていないエクセルたち

エクセル「ー」

ソラ「あの…」

エクセル「ソラ、俺と勝負だ…」

エクセルがブランド・ティータを構えた。ソラは戸惑いながらニルヴァーナを構える、その一方でフェイトは2人の戦いを見守っていた

エクセル「ソラ…お前の力を見せてみる」

ソラ「…ッ！」

ソラが掛けた。エクセルへと接近し双剣のニルヴァーナを振るった

キンッ！キンッ！

ソラ「ッ!？」

エクセルはブランド・テイターではなく、どこから出したのか一本の刀でソラの斬撃を腕を動かしただけで弾いたのだ

エクセル「お前の力はそんな物か…」

ヴォン！

刀が消え、今度は大剣だ。これはエクセルの宿したモノがもたらした能力なのだ

ソラ「…ッ！ニルヴァーナ、ガンフォーム！！」

ニルヴァーナ《ガンモード》

ガシユッ！

刀身が長いニルヴァーナの刀身が格納され、逆に今度は銃身が長いガンモードに変わった。

フェイトはそれを見て関心していた。ティアナのクロスミラージュとは設計が若干違うんだと思いながら、他のメンバーに指示を出していた

ソラ「ショットッ！！」

ドンドン！！

赤黒い二発の魔力弾が飛んできた。しかも一発一発がやたらと大きいため、それにはエクセルは一瞬だけ戸惑い、持っていた鎌を投げた。

エクセル「固定型なら弾き返せる……」

サツとエクセルは地を掛けた。相手の魔力弾が制御ではなく固定型なら、投げた鎌は魔力弾を弾き返しそのままソラへ斬り込む。そうエクセルは思ったが次に見た光景でその考えは捨てざるを得なかった
パリンパリン！！

ソラが放った魔力弾は鎌を弾き返すどころか、鎌を破壊しエクセルへと向かってきた

エクセル「うおっ！…と！？」

魔力弾は背後の壁へ直撃し大穴を開けた。

エクセル「……ふんっ、楽しくなってきた」

ソラ「……………」

ソラは顔を伏せた。

なんであんな大きい一発を撃つたんだ

エクセル「よそ見をするな！！」

ソラ「！？」

ソラが顔を上げた時にはエクセルは懐へ入り込み、持っていた剣の刃がソラの顔へと突き付けられた。

フェイト「勝負あり…かな」

降りてきたフェイトがそう告げた。

ソラ「まっ、まだです！！自分はまだーーーー」

エクセル「だったら午後の訓練に参加するんだな」

ソラ「えっ……」

エクセルは剣を地面に差し、ソラへ手を差し伸べる

エクセル「お前がいつまで自分から逃げるかは知らないが、そろそろ…自分の実力を試してみたくなくてきたんじゃないか？」

ソラは自分の手を見た。

エクセル「もし…お前がこれからも自分から逃げ続けるのならば、この手はとらなくていい。けど逆にーーーー」

ソラ「わかりました」

ソラが唐突にそう呟いた。手を伸ばしエクセルの手を掴んだ

フェイト「じゃあ、ソラが特務六課の戦闘メンバーに加わるのが成
立した所でーーーー」

ガッシュ！

フェイトがバルディッシュを構えた。エクセルはソラの手を離してブランド・ティータを鞘から抜いてソラに下がるよう言った

フェイト「試合だからといって手加減しないよね？」

エクセル「そつちもな…」

2人のライフは2700。同じポジションでの戦い
フェイトとの試合はこれからはじめてではない。お互いの能力と癖が
わかりきった上での勝負は格別なものだ

エクセル「じゃあ…」

フェイト「尋常に…」

2人が駆けた。

―その夜―

エクセル「くう…傷にしみるなあ」

温泉につかり、試合と訓練の痛みを癒すエクセルとソラとエリオの
3人。

エリオ「意外とハードな1日でしたね」

頭にタオルを乗せていたエリオは肩まで湯につけていた。

エクセル「試合の後の訓練が…特にな。なのはもそうだけど、後2
日も保つのかね」

エリオ「保つんでしょね？」

2人で何気ない会話をしている中、ソラは別の温泉でぼつんと星空を見上げていた。

ソラ「エクセルさんは俺を必要としている…のかな」

試合の時に言われたエクセルの言葉をソラは思い出していた。

ソラ「でも…僕の力は危険なのに…それを知っているのに…
どうして」

そこへ—————

ドゥーエ「どうして…もないわよ」

と言われソラは驚き、温泉の中で足を滑らせ、溺れそうになってしまった。ソラの手を引っ張り、ソラを助けたドゥーエに対し

ソラ「なっ、何で温泉に…!?!」

ドゥーエ「入りたいからいるんじゃない(笑)」

ソラへ微笑み返すドゥーエ。ちなみにエクセルたちは気づいていない様で、ちゃんとタオルは巻いていた。

ソラ「だっ、だからって男と一緒に————んツ!?!」

ソラの口をドゥーエの唇が無理やり塞いだ。ソラはいきなりの出来事に目を見開き、まだ唇を重ねていたドゥーエを至近距離から見つ

めていた。

唇を離れたドゥーエは、ソラに背を向ける形で湯につかった。

ドゥーエ「変な理屈を言つと、また唇を塞ぐわよ…」

ソラは気づいていないがドゥーエは頬を赤くしていた。温泉のせいではなく、恥ずかしさでのことだ。

ソラ「じっ、ごめん…」

ドゥーエ「今から言つのは独り言だから…」

ソラ「えっ…?」

ソラは背を向けたドゥーエを見た。するとドゥーエは語り始めた

ドゥーエ「あなたが悩んで練習してたからアドバイスしてあげたのに…あなたは何にも聞いてないのね。」

ドゥーエは右手を頬に当てた。ソラはドゥーエの発言に首を傾げたが、実はソラが昨夜訓練していた時にすずかが入ってきたが、そのすずかはドゥーエが能力で変わった姿でありソラはそれをまったく気付かなかつたのだ。

ーミッドチルダ市街地ー

夜中になり、市街地の所々は鎮まりかえっていた。

そんな中、武装局員の男性は一人で自宅への帰り道を歩いていた。

武装局員「すっかり遅くなつたな……」

局員は曲がり角を通ると、目の前を何か横切りいきなり立ち止まった。

武装局員「なんだ…？」

彼は辺りを見渡すが何もいない。

武装局員「気のせいか…」

彼が歩き出すと、その背後で黒い人影が現れ男性に忍び寄っていく。男性は気付くことなく歩いていった。その人影は男性の背中の数メートルまで近づくと、忍ばせていたナイフを出し

武装局員「……………ぐっ!？」

カシュッ!

ドテッ!

人影は男性の首筋をナイフ斬り裂いた。斬り裂いた男性は地面に倒れた

????「……………違つ」

―翌日 朝―

ピリピリ

その音が全員が眠るロツジ中に響いた。まだ日も昇っていないので、起きているのはほんの2、3人だった。

鳴っているのはエクセルの通信チャンネルだった。まだ眠っていたエクセルはベットから起き上がり

エクセル「んゝ……」

エクセルは通信チャンネルを開き、相手に呼び掛けた。

エクセル「はい…アーシユライトです」

エド「朝早くすみません執務官、エドです」

通信相手はエドだった。

エクセル「どうした…こっちはまだ日は上がってない、まだ寝てる奴もいるから早急に話せ…」

エド「はい。実はこちらの時刻で今から30分前なんですけど、ミッドチルダ市街地の路上で男性局員の変死体が発見されたんです。」

エクセルはため息をつきたくなった。そういった事件は自分の担当ではないからだ

エクセル「そうか…それで？」

エド「ですが奇妙なんです。その男性は武装局員で襲われるはずも

ないのですが、ただ――――」

エクセル「ただ……？」

エド「体中の血が……その……全部、無くなっているんです」

第7話 王の血族たち

―連絡を受けてから六時間後―

合宿の日を早めミッドチルダに戻ったメンバー。特務六課所属の執務官三名は、直ぐ様現場へと向かった。

現場は人集りになっていて、3人が中に入るのも苦労するほどだった。

ティアナ「につ、匂うわね…」

死体を見るために保管してある車内で口元を抑えたティアナが死体の近くに寄った。

フェイト「まあ……ね」

フェイトも同じく口元を抑えた。意外と死体の近くは死臭が酷かった

エクセル「我慢だ…死因は？」

局員「はい、首筋を刃物で切られたものかと。死亡推定時刻は夜中の一時から二時の間かと……」

エクセルは匂いを我慢し、死体の前で。

エクセル「とすると……切られた時点で死んだ可能性は高いか」

エクセルは死体にかげられたシートを少しめくった。処置はしてあ

るから、吐く心配はない

首筋を深々と切られていた。そして問題の“血”は所々しか付着していない

フェイト「なんで血が……………」

局員「目撃者の説明では被害者の近くには誰もおらず、倒れていたから声をかけてみようとしたらそれが死体だったと……………」

ティアナ「そう思わざるを得ないですか…可哀想です」

フェイト「その目撃者は今どこに？」

局員「目撃者なのですが…その、まだ子どもだったので…学校に行かせました」

エクセル「子ども…？」

その言葉にエクセルは反応した。確か発見したのは朝5時過ぎだったはずだとエクセルは思い出していた

局員「はい。一応、身分と学校の名前を確認しました…名前はサラ・ミスズ。Stt.(ザンクト)ヒルデ魔法学院に通う11歳の少女です」

説明を聞いた3人は顔を見合わせた。またかと思いながら、エクセルは

エクセル「じゃあそっちには俺が向かうから、フェイトとティアナ

は周辺の調査といこうか」

フェイト「うん、了解」

ティアナ「この時間だと…急いで登校したヴィヴィオたちに聞いた方が速いわね」

エクセル「了解。じゃあ後で……」

エクセルはその場から急いで退散していった。フェイトとティアナも匂いに耐えきれなくなり、車内から出た。

ティアナ「ヴァンデビルの一件も済んでないのに、忙しくなりそうですね」

フェイト「こういった殺人事件はこれだけで終わったほうがいいんだけど」

どこか不満を隠せないでいるフェイトだった

―その頃―

急な予定だったので、急いで着替えて学校に登校した4人組はとうとうと

ヴィヴィオ「疲れましたね」

アインハルト「はい…それなりに」

コロナ「なのはさんやはやてさんが先生に連絡しておいてくれた助かったよ」

リオ「でも、着いたのが三限目のはじまりでよかったじゃん」

中庭の木の下で4人は昼食を取りながら雑談していると

サラ「あのッ…皆さん」

そこへ弁当箱を持ったサラ・ミスズが来た。

ヴィヴィオ「サラさん どうも」

サラは4人が座っていた所へ腰掛ける（ヴィヴィオとアインハルトの間）

サラ「わっ、私も、ご一緒しても…／／／／／／」

ヴィヴィオ「良いですよ（笑） 私たちも食べはじめたばかりなので」

サラは胸を撫で下ろした。直ぐ様、自分の弁当箱を開けて食べ始めた。

アインハルト「えっと…サラさんでしたか？」

アインハルトはサラのことを知らないなので、自己紹介をしようとしていた。サラはアインハルトを見て

サラ「はい。この前転校してきた、サラ・ミスズと申します」

座りながらも礼儀としてお辞儀をするサラ。アインハルトは手を差しだした

アインハルト「中等科のアインハルト・ストラトスです。」

サラとアインハルトが握手した。すると、サラの手を握ったアインハルトは脳裏に一瞬だけ奇妙な映像が流れた。

アインハルト「…ッ!？」

アインハルトはパツと手を離し反射的に身構えてしまった。それに驚いたサラはビクツと体を震わせた

ヴィヴィオ「どうしました?!」

アインハルトは我に返り、慌てて弁当箱をバツクにしまい

アインハルト「おっ、お先に失礼します…!」

アインハルトはその場から走り去った。

コロナ「どうしたんだろ?」

リオ「さあ…?」

ヴィヴィオ「サラさん、大丈夫ですか?」

サラ「はっ、はい……」

アインハルト「ハア…ハア…ハア…!!」

勢い誤って、正門の所まで走ってきてしまった。胸を強く抑えたアインハルトは正門の壁へ寄りかかり、体を落ち着かせていた。

アインハルト「さっきの…あれは……」

すると、下を向いていたアインハルトの前に大きな影が重なった。

エクセル「なにやってるんだ、こんな所で…?」

アインハルトは顔を上げた。そこには執務官服に身を包んでいたエクセルが立っていた

アインハルト「エクセル…さん」

― 駐車場 ―

とりあえず、昼休みが終わる少し前まで俺の車の近くにあったベンチに腰掛けた。

アインハルト「……………」

エクセル「ほらっ……………」

ピタッ

アインハルト「ひゃっ!!!?!」

黄昏ていたアインハルトの頬へ試しに冷たい飲み物を当ててみると、アインハルトはベンチから素早く跳ね退き、こちらに向かって身構えた。

またこれが可愛い反応なのだ

アインハルト「おおおっ…脅かさないで、くくください!!!!」

エクセル「あはは…隙だらけだぞアインハルト（笑）」

赤くなりながら、アインハルトはまたベンチに座って、飲み物を渡した。

エクセル「ヴィヴィオたちはどうだ？」

アインハルト「問題はありません。魔王が襲う隙も私が与えませんか」

エクセル「熱心なのはいいけど、ヴィヴィオに嫌われないようにな」

アインハルト「そっ、そんな事は／＼／＼／＼」

苦笑するエクセル。赤くなりながらジュースを飲むアインハルト

エクセル「さて、俺はそろそろ仕事に入るか……」

アインハルト「そういえば、エクセルさんはなぜここに…？」

校内を歩きながら、エクセルはヴィヴィオたちを探していた。

エクセル「ああ、目撃証言を聞きにな…サラ・ミスズっていうヴィヴィオと同じ年の……」

すると、アインハルトは立ち止まりエクセルへ

アインハルト「サラさんが…目撃？」

―面談室―

エクセル「じゃあよく覚えてないって事だね？」

サラ「はい……突然のことですし、はじめての経験で……それに私、時々おかしくなる体質で」

泣き顔になりながら、少しずつ話を聞いていくエクセルだがこれ以上話を聞くと恐怖のあまりに狂乱する可能性があったので終了した。

エクセル「本人はまったく覚えてない…か」

すると、通信チャンネルのベルが鳴りエクセルは通信チャンネルを開いた。

エクセル「どうした…？」

通信相手は特務六課の通信士だった。相手は少し慌て口調で内容を説明した

エクセル「なに…別の世界で同じ死因が見つかった？」

俺は通信を閉じ室内にいたアインハルトとヴィヴィオに事を説明した。

エクセル「じゃあ俺は行くけど、2人はせめて複数で行動してくれ…後、サラとは一緒にいてやれ」

ヴィヴィオ「アインハルトさん、帰りに聖王教会に行きませんか？」

アインハルト「教会へ？」

2人は廊下を歩きながら帰りのことを話していた。
ヴィヴィオは教会にいとある人を気にかけているのだ。

―放課後―

ヴィヴィオはいつものメンバーとサラと一緒に聖王教会へ向かっていた。

アインハルト「……………」

アインハルトは歩きながら周囲に気を配っていた。いつ、魔王であるメルフィスが襲ってくるかわからないという考えだ

サラ「あの、アインハルトさん…先程から何をそんなに周りを見渡しているのですか？」

隣にいたサラはアインハルトの仕草に気になって話かけた。

アインハルトは「癖です」と誤魔化した。

―聖王教会―

4人を出迎えたのは、半袖の修道服を着たシスターだった。

????「ヴィヴィオに霸王っ子にお仲間とその友達一名！ようこそ、聖王教会へ！」

シスターの名前はセイン。シスターらしくない口調や態度は別として、彼女はこの教会で保護している人物の世話係を担当していた。ヴィヴィオたちはとある部屋へ案内された

セイン「はい！ヴィヴィオと霸王っ子以外の女の子たち　しばしお待ちを」

セインが扉を開き、まずはヴィヴィオとアインハルトを招き入れた。室内には一つのベッドがあり、そのベッドに一人少女が聴こえるか聴こえないのかわからない静かな寝息を立てながら少女は眠っていた。その周りには心拍や色々ものを計る機器が設置されていた

ヴィヴィオは少女の隣にあった椅子に座り、少女の手を優しく握って優しく語りかけた。

ヴィヴィオ「ごきげんようイクスヴェリア様。」

少女の名前はイクスヴェリア。一年半前に起こったマリアージュ事件の重要人物であり、ヴィヴィオやアインハルトと同じく「冥王」の名を持っているが2人とは違って、彼女はベルカ時代の頃にプログラムが施された眠りに入り、マリアージュ事件に不完全で目覚めた。事件の終結後に再び眠りに入った

早くいえばイクスはベルカ時代から存在する王、その人なのだ。

ヴィヴィオ「今日は報告があります。」

ヴィヴィオは魔王メルフィスのことを淡々と説明していた。その悲しい表情を見ていたアインハルトも心が痛んだ。

しばらくしてから、リオやコロナ、サラを室内に招き入れたしばらくしてから聖王教会を後にした

その帰り道のこと

アインハルト「……………」

アインハルトとサラは帰る方向が一緒だった。無言が続いた、そして最初に口を開いたのらサラだった

サラ「先程の女の子はイクスさんという方のですか…？」

アインハルト「はい…私やヴィヴィオさんの親戚と思ってくれれば……………」

本当は王様の関係なんて言えないので、アインハルトはそう答えた。

サラ「そうですね…」

アインハルト「私が会ったのは本当は去年のことです。最初は信じられませんでしたが…その、あんな状態だとは」

そんな会話が別れ道まで続いた。アインハルトとサラは別れてそれぞれの道を歩いていた

サラ「……………誰？」

誰もいない場所でサラの前に誰かが仁王立ちしていた。サラは怯え

ながら後退りした

???「……みつけた、わたしの後継者」

その夜、特務六課の駐屯地では会議が行われていた。はやてを含め、エクセルとフェイトはもちろん六課の中にいる各分野の代表だった。

リン「調査の結果を大方まとめても、この変死体の手口や襲い方もヴァンデビルと似てはいますが、血を奪う…なんてことはヴァンデビルはしませんでした。」

リンフォース「少なくとも、これはヴァンデビル以外の何者かの仕業です。より人体の知識と組織があると推測します」

ティアナが立ち上がり画面に今日の時間帯を一时间ごとに表示した。それは各世界での同一の事件だった。

ティアナ「この1日で同一の事件が各世界から報告されています。リンフォース秘書官の言った通り、これには組織が存在する可能性が極めて高いです」

ティアナが座った。次に立ったのは武装隊であるシグナム

シグナム「もし、ヴァンデビル以外の組織が出てきたら武装隊としては大いに結構だが、人数には限りがある。今日1日で民間人を除いてもほとんどが武装隊の局員だ…これは武装した局員の数を減らす敵の策略かもしれない」

はやて「そのことを考えたら、問題がいたる所で発生するもんやでシグナム」

デバイスルームに入って、すぐ目の前の光景にフェイトは我を忘れて大絶叫してしまった。

その光景とは――

フェイト「かつ、かつかつ…母さんッ…!!?」

そうなのだ。目の前にいたのはここに居ようはずのないフェイトの母親、プレシア・テストロツサなのだ

プレシア「あらフェイト。悪いんだけど少し静かにしてくれる…」

フェイト「はっ、はい…!」

過去のトラウマなのか、つい緊張して返事をしてしまったフェイト。

プレシアはパットをいじって、水槽に入ったレイジングハートを見つめていた。周りには、シャーリーとマリーがプレシアに指示されながらてきぱきと動いていた。

フェイトはなのはを引っ張って室内の角へサッと移動した。

フェイト「どっということなのは…なんで母さんがミッドに」

なのは「レイジングハートの改装に手を加えたいって言ったから…」

あはは(汗)「

なのはが珍しく目を泳がせた。

フェイト「目が泳いだよ…」

なのは「うっ…（ギクッ）」

フェイトがなのはを問いただそうとしたその時だった。

シャーリー「なっ、なのはさぁ〜ん」

なのは「あっ！シャーリーが呼んでるから行ってくるね（笑）！！」

フェイト「あっ！なのはッ…！！」

逃げたつと心の中で呟いたフェイトだった

―その夜中のこと―

聖王教会

警備の騎士たちがそれぞれの場所を見回っていた。

セイン「今日も月が綺麗だなあ〜」

そんな中、イクスの部屋の窓から夜の月を見上げていたセイン。イクスは星が大好きだとスバルから聞いたセインは、満月の時はこうして真夜中までカーテンを開けて、月明かりを部屋に差し込むようにしているのだ。

セイン「そろそろ月が傾くから今日はもうカーテンは閉めるね…」

ゆっくりとカーテンを閉じて、窓をしっかりと鍵をかけてセインはイクスの周りにあつた機器を再度確認し

セイン「それじゃあまた明日。ごきげんようイクス」

セインは部屋から出て行った。

セインは鍵をきちんとし、ルンルン気分でイクスの部屋を後にした。

騎士「ふわあ…」

見張りをしていた騎士が欠伸をしていると、その後ろを黒い影が通り抜ける。

騎士「ん…？」

欠伸をしていた騎士は不思議そうに背後を振り返る。だがそこには

何もいない。振り返った騎士は首を傾げていると

「????」……………」

騎士「うっ!?!わあ…!」

背後に現れた影が騎士に飛び付き、忍ばせていた小型ブレードをその騎士の首に突き刺した。騎士は何が起きたのかわからぬまま、息絶えた。

「????」……………」

小さな影はそのまま、隣にあった扉へ入っていった。その直後、倒れた騎士を見つけた他の見回りの騎士を見つけ、周りに大きな声で叫んだ。

騎士「侵入者だぁ……………」

その叫びに教会全体が動き出した。眠っていたシスターのデイードやオットーもしくり、巡回をしていたセインがそれに素早く反応した。

「????」ミスった……………」

イクスとカリムの部屋の前に警備の騎士が付き、辺りを警戒していた。

デイド「この部屋だけは何がなんでも守らなければ…」

イクスの部屋の前に、手慣れたデイドもつく。他の2人は手慣れた騎士、これで大抵の侵入者でも対処できる
少なくとも、デイドはそう思っていた。

騎士「いたぞー！ーッ！！」

遠くで騎士の叫び声が聞こえた、それと一緒に断末魔の叫びも聴こえてきた。それがどんどん近づいてきていた。

ゴクリツと他の2人が唾を飲む音を私は聴き逃さなかった。

デイド「ー！ー！来るッ！！」

デイドはツインブレードを構えたと同時に通路の先にあった扉が吹き飛び侵入者が来る…はずだった。

デイド「………来ない？」

来るはずの侵入者が来ないのだ。デイドはセインに通信を入れ、状況を報告する

セイン《私は一応、潜って教会中を探してくる。2人は警戒を続けて…》

デイド「わかりました、気を付けて…」

イクスの部屋ー

カシャッ……………ストッ

小さな影が天井の通気口から降りてきた。どうやら、デイドたちを警戒し天井裏に上がりやり過ごしたようだ

小さな影は足音を消し、イクスへ近づいていく。

???「やつと見つけたわ……………冥王さま」

小さく呟いた。その声や体は幼い子供だ、部屋の窓のカーテンの間から月明かりがイクスに照らされた。

???「せつかくの再会だけど…あなたの存在は邪魔なの……………」

小さな手がイクスの体へ伸ばした時、あり得ないことが起こった。機器の心拍音が上昇しイクスの瞼が動き、口が動いた

イクス「……………やめなさい」

???「…ッ!?!」

小さな影が身動くとイクスの目が開き、その小さな体を起こした。

イクス「久しぶりね」

???「あり得ない…あり得ないことよ……………」

イクスが目覚めたことに動揺して、小さな影が後退りした。

イクス「私もそう思ってる。こんな目覚めはあり得ないから…きつと、決められていたのでしょうか」

ベットから立ち上がり、イクスはその小さな影を見つめた。

イクス「私を殺すなら、ちゃんと計画を立てて来なさい。でないと――」

イクスの口調はいつもとは違い、まるで“王”の口調だ。

???「そんな脅しは…」

影は懐からナイフを取り出して、投げた。

イクスはかがんで避けた。投げたナイフは窓ガラスを勢いよく割った

カシャーーン!!

その甲高い音がそこらかしこに響き渡った。

音を聴き外にいたデイドが部屋へ駆け込んできた。

???「ちつ…!!」

デイド「待て…!!」

小さな影は割れた窓から飛び出し、逃げ出した。デイドはその小さな体（首）に、王の紋章が刻まれていたのを見逃さなかった。

イクス「彼女も…私たちと同じく王の血を引いた者の一人、決して

争ってはならない血筋……」

デイドはイクスの方へ振り返り、駆け寄った。

デイド「イクス様、お怪我は…？」

デイドが言うと、イクスは先程までの表情とは逆に笑顔へと変わり

イクス「大丈夫です（笑）」

―次の日の朝―

聖王教会の庭で2人は再会した

スバル「……………」

スバルはイクスを見た。

イクス「スバル…その……」

戸惑いながら、スバルを見るイクスはとても可愛く見える。スバルはしゃがみ込み、イクスの手を優しく包んだ

スバル「お久しぶり、イクス（笑）」

戸惑っていたイクスの表情が笑顔へと変わった。それは他人から見れば、姉妹や親子のように見えていた

イクス「はい。久しぶりです（笑）」

スバル「えつとねイクス、あっちにいる2人がお話ししたいって言ってるよ」

スバルが指差した方向には、ヴィヴィオやアインハルトが立っていた。イクスは2人を見つめているだけでスバルが肩を叩かなかつたら、ずっと見つめあっていたかもしれない。スバルがイクスを後ろから押して2人の近くまで行くと

イクス「あつ、あのっ……／＼／＼／＼」

スバルは「私はあっちにいるから」と言っただけでその場所から離れていった。

ヴィヴィオ「イクス、直に会うのはこれが初めてですよね？」

イクスに語り掛けたヴィヴィオ。

イクス「あつ、あの陛下！／＼／＼」

ヴィヴィオ「あはは、陛下はやめてっば〜（笑）」

ヴィヴィオの口調に未だ戸惑いを感じながら、イクスは隣にいたアインハルトを見た。

アインハルト「はじめまして、イクスヴェリア様。アインハルト・ストラトスです」

イクス「ストラトス……？」

イクスは首を傾げた。

アインハルト「イングヴァルト…と言えばお分かりのはずです」

そう言われてイクスはアインハルトの目を見た。ヴィヴィオと同じく虹彩異色にイクスは気づいて、慌てた彼女は足を一步引いて片膝を地面につけ頭を下げた。

イクス「失礼しました！霸王イングヴァルト様の血縁とは知らずにとんだご無礼を…！！」

イクスの口調にアインハルトは目をぱちくりさせた。昔の時代に生きていたとはいえ同じ王だ、いくらなんでも今の時代の自分からすれば、その態度や礼儀作法はあまりにおかしい。アインハルトはイクスの前で膝を折った

アインハルト「顔を上げてください、イクスさん…」

イクス「……はい」

顔を上げてアインハルトを見たイクス。

アインハルト「私はイングヴァルトの血を引いていますが、今の私は王ではありません。だから、そんな顔をしないでください」

イクス「……はい／＼／＼／＼／＼」

ヴィヴィオ「アインハルトさんは照れ屋だけど、とても優しい人なんだ」

ヴィヴィオが立ち上がったばかりのイクスの両肩に手を乗せてアイ

ンハルトをからかった。

アインハルト「ヴィヴィオさん！からかわないでください！／／／
／」

ヴィヴィオ「本当のことじゃないですか」

アインハルト「もう、怒りますよ！／／／／／／」

赤くなりながら、ヴィヴィオにからかわれているアインハルト。そんな2人を見ていたイクスは

イクス「クスツ…（笑）」

アインハルト「…？／／／／／」

イクスが楽しそうに笑い始めた。口元を押さえて楽しそうに笑っているイクスの顔は幸せが一杯だった

それを遠くから見ていたスバルとは言うところ…もらい泣きしていた。

スバル「うっ！うっ…よかったね…イクス…グスツ！（泣）」

一方、はやてはというとカリムと話し合っていた。

カリム「どう？調査の方は進んでる…？」

紅茶を飲みながら話し合っていた2人。

はやて「いやあくそれが全然進まんから困ってるどころなんや〜あはは…」

紅茶を一口飲んで誤魔化すはやて。

カリム「まあ、仕方ないわね手掛かりが少ないんだもの。」

はやて「ヴァンデビルは膨大な魔力を求めて動き回るってのはわかってるんやけど…最近静かなんや。嵐の前の静けさみたいな感じや」

カリム「本当ね……そういえば、なのはさん達や守護騎士の皆さんは…？」

はやて「なのはちゃんは教導隊に用事があるとかで出かけてる。守護騎士のみんなは駐屯地で訓練三昧、フェイトちゃんとエクセルくんは第2世界に行ってる」

カリム「エクセル？…ああ、あの人ね」

はやて「今の間は忘れとったって事か…？」

カリムは照れるように苦笑した。

カリム「会う機会がないからせいかしら。また会いたいわ（笑）」

― 第2世界 ―

エクセル「くしゅっ！」

エクセルは車の中でくしゃみをした。今、車を運転しているのはフ
ェイトだから心配はなかった

フェイト「風邪…？」

エクセル「いや、誰かが噂してるんだろ」

エクセルは窓を開けて、車の空気を入れ換える

フェイト「えっと…どっちかな？」

信号機が赤だったので止まっている間に進路を確認する。今2人が
向かっているのは、武装隊の駐屯地だった

エクセル「この道は左だな…」

地図を確認しながらフェイトに言ったエクセル。信号機が変わった
ので道を左折した

エクセル「しかし、襲われた武装隊の同員もタフだね。体は重傷をおったのにきちんと証拠画像を残すなんて……」

エクセルは座席の背もたれを倒し両手を首に回した。

フェイト「画像はシャリーに修正してもらってるから、私たちは事情を聞くだけだね」

エクセル「その後は部隊長のはやてに報告して、街を巡回……」

2人で日程を確認しながら駐屯地へ向かった

↓第2世界第119陸部隊駐屯地↓

車から降りると、フェイトだけ部隊の人に案内され部隊長の部屋へ、エクセルは別の場所へ

フェイト「本局執務官、フェイト・T・ハラオウンです。」

フェイトが目の前にいる部隊長に敬礼した。

???「君があ有名な執務官かね……」

フェイトに背を向けていた部隊長が振り返り

???「部隊長のレーチエル・J・エンペラー佐だ。」

エンペラー佐は外形はオヤジだが、これまで数多くの功績を部隊と共に残してきている

フェイト「ではエンペラー一佐、襲われた局員の情報をお願いします」

エンペラー「すまないが部下の情報を公開することはできない。」

フェイト「公開したくないのは理解できます。ですが、公開して襲われた理由を見つけたすのも解決のーーー」

エンペラー「執務官殿、人には見つけてはならないものもあるのを知っているかね？」

エンペラーがフェイトの言葉を遮ってそう言った。

フェイト「はい、存じています。人には知られたくないことは1つや2つはあるものです」

エンペラー「だがそれが、罪を犯したものであったら……どうするかね？」

エンペラーが窓を開け、葉巻を取り出して火をつけた。

フェイト「私なら本当かどうかを確認めます。」

部屋に葉巻の煙が少しだけ渦巻いた。フェイトにも葉巻の匂いがつたわってきた

エンペラー「ふう〜……」

エンペラーが煙を吐き出した。

エンペラー「もしそれが友人だとしても……か？」

フェイト「……なにを言いたいのです？エンペラー一佐」

フェイトは背を向けていたエンペラーを睨んだ。エンペラーの言い方がまるで、自分や親友のはやての事を言っているようでフェイトは内心腹を立てていた。

エンペラー「私はこう見ても情報収集が得意だね。キミや仲間のこととはよく知っている」

エンペラーが葉巻を灰皿に捨て、フェイトに振り返り近づいてきた。

エンペラー「例えば…闇の書事件の犯人、八神はやて捜査官やその家族構成が元は犯罪者だとか……」

フェイトは拳を握りしめた。

エンペラー「そうそう、お前と一緒に来た男のことをキミは知っているかな？」

フェイトは反応した。何故この男はエクセルのことを知っている？そもそも、エクセルのなにを知っているのか

フェイト「エクセルが…どうしました？」

エンペラー「キミは彼と親しい関係のようだが、知っているのかな？あの男の秘密を……」

その頃のヴィヴィオたちは

イクス「魔王メルフィスが私を殺そうとしたんです。」

イクスが語ったのは、昨夜自分を襲ったのは魔王メルフィスだということだ。だがヴィヴィオは疑問を抱いた

聞いた話では襲ったのは小柄な人影だという。魔王メルフィスが小柄だなんて信じられないのだ

ヴィヴィオ「でも、メルフィスは小柄じゃないですし、体に紋章なんて」

アインハルト「私も紋章なんて見てません」

イクス「紋章といっても必ずしも刺青とは限らないんです。――紋章というのは、魂なんです」

―同時刻 特務六課駐屯地―

シャーリー「画像修正完了っつと。これを転送して」

シャーリーが証拠画像を送ろうとしていた時

プレシア「シャーリー、ちょっといいかしら」

プレシアがレイジングハートを持って近寄ってくる。なにやらむず

かしい顔をしていた

シャーリー「なんででしょうか？」

プレシア「レイジングハートの記録メモリーを回覧してほしいんだけれど……」

頷いたシャーリーはレイジングハートを受け取り、パットに接続する。

シャーリー「なぜ記録メモリーを……？」

操作しながらプレシアに尋ねるシャーリー

プレシア「さつき試しに起動させてみたんだけど、変に相性が良くてね……気になって」

シャーリー「ああ……確かに変ですね。大抵のインテリ型は誤作動を起こすはずなのに」

パーツを組み換えたインテリデバイスは大体が誤作動を起こすのだが、まれに相性がいいことがあるのだ。だがそれは、インテリ型でない方の例である

プレシア「バルディッシュユなら設計者がちゃんとしてるからわかるけど……レイジングハートの出所は今だに謎なのよね」

近くにあった椅子に腰掛けるプレシアは額に指を当てた。

シャーリー「レイジングハートさん本人も教えてくれないんですよ

ね……」

すると、記録メモリーが表示された。まずは最近の記録からここ数年の記録を見ていく

プレシア「この辺りのメモリーはいいからもつと前の記録をお願い」

シャーリーはパットを操作し、なのはとの出会いの辺りまでをチェックしていくと

シャーリー「これは…映像データですね。ロックが掛かってるみたいですけど……」

プレシア「大分古いデータみたいね。換わって……」

シャーリーとプレシアが席を交換し、ロックを解除するためにパットの操作を始める

プレシア「固いプロテクトね・・・パスワードが掛かってる。それほどまでにして守りたいものなのね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860w/>

魔法少女リリカルなのは ANGEL'S OF DARKNESS

2011年11月9日00時04分発行